



『急救仙方』 卷十、卷十一 訳註稿 (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 早紀子, 山本, 優紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017692

『急救仙方』 卷十、卷十一 訳註稿 (1)

池内早紀子、山本優紀子

大阪府立大学人文学会 人文学論集 抜刷

第40集 (2022年3月)

『急救仙方』 卷十、卷十一 訳註稿 (1)

池内早紀子^a、山本優紀子^{b,c}

a：大阪府立大学大学院人間社会システム研究科博士後期課程

b：大阪府立大学人間社会システム科学研究科客員研究員

c：立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員

はじめに

『正統道藏』太平部に収載される『急救仙方』は、医書である。この書の巻十、巻十一は現在の結核に相当するとも云われることがある伝屍勞瘵の病に関する記載である。その巻十には病を引き起こす「虫」の図を記載している。これは「虫」を病の原因と考え、「虫」の図を添えた。『蟲書』¹を著している吉田流などの日本の中世から近世の鍼灸と関連する点がある。例えば『蟲書』では、一番目に実際に観察できる寄生虫「寸白虫」(サナダムシとされる)の図と説明がある。しかしそのあとに続くのは実際には存在しない虫である。二番目に記載されるのは「傳尸病蟲」の図と説明である。この虫は『急救仙方』の虫と関連があるように思われる。著者の一人池内は日本の中世から近世にかけての病を引き起こす「虫」の図の系統を検討してきた²。本稿ではこれに関連すると考えられる巻十と巻十一を訳出する。

『急救仙方』について

『急救仙方』が、朝鮮医書に影響を与えていたことは知られている。『朝鮮医学史及

1 『蟲書』、別名『鍼口伝蟲書』、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵(乾三六四九)。

2 池内早紀子「『諸虫針治論図』諸本の異同」、第2回「日本鍼灸医術の形成」研究会、京都大学人文科学研究所、2018年10月7日。池内早紀子、大形徹「日本鍼灸吉田流『蟲書』の成書過程—從圖示的「虫」圖的比較入手—」、『从中古到近代写本文化與跨文化交流』国際學術研討會論文集、北京大学、北京大学東方文学研究中心、1(1) pp.10-25 2019年8月。池内早紀子「鬼系の病因論から蟲系の病因論—日本における病因論の受容と変容—」阪神中哲談話会第404回例会、大阪府立大学、2019年12月7日など。

疾病史』『朝鮮医書誌』を著した三木栄は、朝鮮で広く用いられた中国の「^マ道教的医書」として、晋・葛洪『肘後備急方』、唐・孫思邈『千金方』などとともに、『急救仙方』には「撰者不明、外科書、明の道藏に含まれる」と解説を加え紹介している³。さらに上田善信は、朝鮮・世宗が金礼蒙・柳誠源・全循義等に命じて編纂させた医学全書『医方類聚』266巻（1445年撰成、1465～1477年刊）所収の『急救仙方』についての報告を行っている⁴。

上田の報告にもあるが『正統道藏』太平部に収載される『急救仙方』は、『四庫全書』に収載される同名の書とはその内容は大きく異なっている。上田によれば、「『急救仙方』は宋代に成立した著者未詳の方書⁵で、現伝のものに『四庫全書』所収の6巻本（『永楽大典』からの輯佚本。以下、四庫本と略称）と『道藏』所収の11巻本（以下、道藏本と略称）の2種がある。四庫本は巻1が背瘡治法、巻2が疔瘡治法、巻3が眼科、巻4が痔證、巻5が雜瘡、巻6が雜證から成る。道藏本は巻1～巻5が産科及び婦人科、巻6～巻7が仙授理傷統断秘方、巻8が疔瘡、巻9が痔瘡、巻10～巻11が上清紫庭道瘡仙方論で、構成が異なるだけではなく、四庫本と同内容である巻8と巻9も記載順が異なり、他の医書からの引用も見られて、四庫本とは大きく異なっている」という。成立の年代について、蕭登福は「ここで記述されていることは、すべて唐・宋の事であり、また明代の初めに編纂された永楽大典がすでにこの書を収録している。つまりこの書の成書はおそらく宋代であろう」⁶と述べ、上田の「宋代に成立した」と同じである。それに対して、任継愈は淨明道⁷の方法が含まれることから「明代」の成立ではないかと推測している⁸。

3 三木栄「朝鮮の道教医学」『朝鮮学報』（16）、朝鮮学会、1960年、pp.71-76。

4 上田善信「『医方類聚』所収の『急救仙方』について」『日本醫史學雜誌』第60巻第2号、日本医史学会、2014年、p.204。

5 「方書」。処方などを載せた医書。「史記」扁鵲倉公列伝に、「（陽慶）謂意曰、盡去而方書、非是也」とある。

6 「書中稍可擬以論斷者、如徐序中語及唐代孫思邈『千金方』、書中卷六言及唐会昌事、卷十「医伝屍方越王文」語及「淳化九年」、淳化為宋太宗年号（990～994）、僅五年並無九年、疑有誤、以所言皆唐宋事、而明初永楽大典已収録此書、疑此書撰成在宋代」、蕭登福撰『正統道藏総目提要』、文津出版社、2011年、p.1126。

7 「淨明道」については秋月観映による次のような解説がある。「許真君と呼ばれる晋代の許遜を祖師として、西山（江西省南昌府新建県）の遊帷觀（後の玉隆万寿宮）を中心に活動を続けてきた許遜仙道教団の道士何真公が、遼・金の侵入による社会的混乱の中で苦しむ難民の救済を、許真君に祈って「淨明の秘法」を得て（1127年）布教活動を始め、ついで元初の玉隆万寿宮の道士である劉玉が、この所説に含まれる雑多な呪術的教法を清整し、淨明（忠孝）道を開創して以来、独自の内面的・実践的な倫理教説をもって社会的な教化活動を行ってきた」、野口鑑郎ら編『道教事典』、平河出版社、1994年、p.283。

8 「其中巻十引「大帝玄科」等文、述守庚申法、巻十一録「淨明法中治瘡療」、皆与道教有關。其中

上田は「巻10～巻11が上清紫庭追癆仙方論」とするが、巻十には「上清紫庭追癆仙方論」「總論傳癆」「蘇遊論」「癆療諸證」「浴法」「守庚申法」「修合藥法」「醫傳屍方越王文」「論已試功效」、巻十一には、「上清紫庭追癆仙方品」「黃帝灸二十一種癆圖并序」が収載される。いずれも癆療（勞瘵）⁹に関連する内容である。これらが含まれているのは道蔵本のみである。ゆえにこれを訳出したい。

Nathan Sivinは『道蔵通考 The Taoist Canon』で『急救仙方』と明・邵以正『青囊雜纂』との関連を指摘している¹⁰。『青囊雜纂』には、いくつかの版本があるようだが、国立公文書館所蔵『青囊雜纂』九巻では、「済急仙方」、「徐氏胎産方」、「仙伝済陰方」、「仙伝外科集験方」、「秘伝外科方」、「仙授理傷統断秘方」、「上清紫庭追癆仙方論法」、「錢仲陽瘡疹証治」、「秘伝経験方」からなる¹¹。「仙伝済陰方」、「仙授理傷統断秘方」、「上清紫庭追癆仙方論法」など道蔵本『急救仙方』と共通すると思える項目が見える。ただ全く同内容の書であるとは言えない。四庫本と道蔵本の差異や、道蔵本の成書に関する事など『急救仙方』の書誌学的課題に関しては稿を改め検討したい。

凡例

一、これは、『正統道蔵』太平部、側号、徐守貞編『急救仙方』十一巻（SN1164）のうち、「癆療」に関連する巻十及び巻十一を訳註するものである。今回は巻十の浴法までとし、巻十の浴法以降及び巻十一は引き続き行いたい。

（「SN」は、Kristofer-Schipper編『道蔵通検』1975年に付された經典番号である）。

- 一、原文、訓読文、口語訳の順に配列した。原文は枠線 で囲んだ。
- 一、底本は上海書店出版社涵分楼本『正統道蔵』太平部、側号、徐守貞編『急救仙方』（SN1164）、1988年（北京白雲觀所蔵明本影印版）を用いた。文字は底本のまゝを用いた。
- 一、原文には適宜、句読点をほどこした。〔 〕内は、原文の割り注である。
- 一、訓読は通行の文字を使用し、仮名遣いは現代仮名遣いとした。
- 一、口語訳には、内容の理解をたすけるために、若干の箇所に（ ）をつけて説明を補っ

録浄明法、則似出于明代」、任繼愈主編『道蔵提要』2版、中国社会科学出版社、1991年。

9 「癆瘵」あるいは、「勞瘵」とも。『漢方用語大辞典』には「病名。伝染性の慢性の消耗性疾病をいう。肺結核に類する」とある。

10 Kristofer Schipper, Franciscus Verellen 『道蔵通考 The Taoist Canon』、The University of Chicago Press、2005年、pp.774-777。

11 明・邵以正『青囊雜纂』9冊、子035-0007、国立公文書館所蔵。

た。文意を正確に提示するために原文および訓読文との関係が不統一となった場合がある。句読点も訓読と口語訳とは必ずしも統一していない。

- 一、注釈では、「」内の引用文は原文のままの文字を、書名などは通行の文字を使用した。
- 一、医学用語は、創医学会術部『漢方用語大辞典』、燎原、2001年（以下『漢』と略す）、中国中医研究院『中医大辞典』、人民衛生出版社、2004年（以下『中医』と略す）などを参考にした。
- 一、生薬については南京中医薬大学編『中薬大辞典』第2版、上海科学技術出版社、2006年（以下『中薬』と略す）、赤松金芳『新訂和漢薬』、医歯薬出版、1994年（以下『新訂』と略す）、難波恒雄『原色和漢薬図鑑』、保育社、1986年（以下『原色』と略す）などを主に参考にした。
- 一、生薬の原植物と現在いわれている植物との比定は難しいが、ひとまず参考のためその和名を記載した。これらについては、前掲書以外に第18改正日本薬局方、富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物データベース (<https://ethmed.toyama-wakan.net/Search/>)、植物和名一学名インデックス YList (<http://ylist.info/index.html>)などを参考にした。
- 一、注釈の古典本草書による記載は、この書の成書の時期と比較的近いと思われる宋・唐慎微撰『証類本草』を中心に取り上げた。これについては宋・唐慎微撰、尚志鈞等校点『証類本草』（重修政和經史証類備用本草）、華夏出版社、1993年を参考にした。

急救仙方卷之十

上清紫庭追癆仙方論法

老叟自序〔傳世已久、罔知姓名、惟存此文、不敢妄加其字、以俟知者。〕

【訓読】

老叟自序〔世に伝わること已に久しきも、姓名を知る罔し、惟だ此文を存するのみ、敢えて妄りに其の字を加えず、以って知る者を俟つ。〕

【口語訳】

老叟自序〔すでに長い間、世につたわっているが、(老叟の) 姓名はわからない、ただこの文が残されているだけである。あえてむやみに書き加えることをせず、誰なのかをわかる人を待ちたい。〕

吾自處世以來、精研藥術、急救濟危、鍼灸明堂、無不詳覽、尋文檢籍、洞視五臟之盛衰、緬懷古人、世莫能究。至如晉景公何爲而死、號太子何爲而生、吾思刮骨續筋、開腸取病、惟有傳屍之病最爲難測。雖是患起一身、變動萬種矣。爲醫者、能明脈候、察病根本、如此治療、固不爲難。若差毫釐、則失千里。夫傳屍瘠者、皆因三屍鬼疰、九蟲傳災、具載其原、以開未悟。

【訓読】

吾れ世に処りて自り以来、薬術を精研し、急ぎ救い危を済いて、鍼灸明堂¹²、詳らかに覽ざる無し、文を尋ね籍を^{あらた}検め、五臓の盛衰を洞視し¹³、^{ほろ}緬かに古人を^{おも}懐うも、世よ能く究むる莫し。晋の景公何為れぞ而ち死し¹⁴、號の太子何為れぞ而ち生くるが¹⁵如きに至りては、吾骨を刮り筋を^{なんす}続き、腸を開きて病を取るを思るも、惟だ伝屍^{16・17}の病のみ最も測り難きと為す有り。是れ患一身に起ると雖も、變動すること万種なり。医を^{わづらい}為むる者、能く脈候を明かにし、病の根本を察し、此くの如く治療すれば、固より難きと為さず。若し毫釐に^{ごうり}差^{たが}わば、則ち千里に失す。夫れ伝屍瘠なる者は、皆三屍・鬼疰¹⁸・九虫の災を^{つぶ}伝^{もと}うるに^{もと}困りて、具さに其の原を載せ、以て未だ悟らざるを開く。

12 「鍼灸明堂」については、『四庫全書』所収、『明堂灸經』、提要に「考唐志有黃帝十二經明堂偃側人圖十二卷。茲或其遺法歟。其曰明堂者。錢曾讀書敏求記曰。昔黃帝問岐伯以人之經絡。盡書其言。藏於靈蘭之室。泊雷公請問。乃坐明堂授之。後世言明堂者以此。今醫家記鍼灸之穴。爲偶人點志其處。名明堂。非也。今考舊唐書經籍志。以明堂經脈。別爲一類。則曾之說信矣。古法多鍼灸並言。或惟言鍼以該灸。靈樞稱鍼經是也。自王濬外臺祕要。始力言誤鍼之害。凡鍼法鍼穴。俱刪不錄。惟立灸法爲一門。此書言灸不言鍼。蓋猶濬志也。」とある。

13 『史記』扁鵲倉公列傳第四十五に、扁鵲が五臓を透視する話がある。「扁鵲以其言飲藥三十日、視見垣一方人。以此視病、盡見五藏癥結、特以診脈爲名耳」。

14 『春秋左氏伝』成公、伝十年にこの話がある。「(晋)公疾病。求醫于秦。秦伯使醫緩爲之。……醫至。曰。疾不可爲也。在肱之上。膏之下。攻之不可。達之不及。藥不至焉。不可爲也。」

15 『史記』扁鵲倉公列傳にこの話がある。「號太子死。……有間、太子蘇」。

16 「伝屍」、伝尸。『漢』に「肺結核の重いもので、代々に伝染するもの」。唐・王燾『外台祕要方』卷十三に、「傳屍方四首」があり、この『急救仙方』と同じ蘇遊論がある。

17 「屍」は「尸」に通用。白川静『字通』では以下のよう^{かたし}にいう。「『説文』八上に「終主なり」とあり、葬るべき屍体をいう。死してなお葬らぬときは尸を立てることがなく、それで屍を尸主という。『礼記』曲礼下に「牀に在るを屍と曰ふ」とみえる。死は残骨を^{かたし}拝する形。尸・屍の二字は通用することが多く、『周礼』春官、大司楽に「屍の出入するときは、則ち肆夏(楽曲の名)を奏せしむ」とあるのは、尸の意である。屍は尸に死を加えて、尸主である尸と字形を区別したものである」。

18 「鬼疰」は、『太平聖恵方』治鬼疰諸方に、「夫人先無他痛。忽被鬼邪所擊。當時心腹刺痛。或悶絕倒地。如中惡之類。其得瘞之後餘氣不歇。停住積久。有時發動。連滯停住。乃至於死。死後注易傍人、故謂之鬼疰也」とある。

【口語訳】

私は、この仕事をするようになって以来、薬（物）や（医）術を精しく研究し、救急処置で危急を救い、鍼灸明堂（医書）に、精しく眼を通さないと言うようなことはなかった。文を探し求め書籍を^{あらた}検め、五臓の盛衰の状態を透かし視て、古人に思いを馳せるが、（今の）世間では究明できていない。晋の景公がどうして死に、虢の太子がどうして生きることができたというような事にいたっては、私は骨を刮り筋をつなぎ、腸を開いて病を取ったのだと思う。ただ伝屍の病は最も推測することが困難である。この病は一つの身（体）に起るといっても、さまざまに変化する。そのため医者は、よく脈の兆候を明らかにして、病の根本をつぶさに観察し、このように治療すれば、本来、難しくはならない。もしわずかにでも間違えれば、その失うものは厖大である。そこで伝尸癘というものは、すべて三屍、鬼疰、九虫が災を伝えることに因るので、詳細にその原因を記載して、そして未だに理解できていないところを説明する。

総論傳癘

【訓読】

総べて伝癘を論ず。

【口語訳】

伝癘について総論する。

傳屍癘瘵、皆心受病、氣結血凝、故有成蟲者。蓋由飲食酒色、憂思喪真、遂至於此。凡蟲爲蠱、以血凝而氣養之。氣血在胞、即爲正氣、氣中即爲瘵塊、凝在心部即爲蟲。悉由不正其心、憂思業緣所致。三屍九蟲之爲害、治者不可不知其詳。九蟲之内、而六蟲傳於六代、三蟲不傳者、蝟、蛔、寸白也。六蟲之内、或藏種毒而生、或親屬習染而傳。疾之初覺、精神恍惚、氣候不調、切在戒忌酒色、調節飲食。如或不然、五心煩燥、心腎夜汗、心乃松悸、如此十日、頓成骨瘦、面黃光潤、此其證也。妄信邪師、祈禳求福、庸醫用藥、延蔓歲時、方知病重。苟非警戒、禍福反掌。此人死後、兄弟子孫、骨肉親屬、綿綿相傳、以至滅族。

【訓読】

伝屍癘瘵は、皆な心、病を受け、氣結ばれ血凝るが、故に虫と成る者有り。蓋し飲食

酒色に由りて、憂思し真を喪い、遂に此に至る。凡そ虫、蠱と為るは、血凝るを以て気之を養う。気血は胞に在れば、即ち正気と為り、気中^{あた}らば即ち瘕塊と為り、凝りて心部に在らば即ち虫と為る。悉く其の心を正さず、業縁の致す所を憂思するに由る。三屍九虫の害を為すは、治する者、其の詳びらかなるを知らざるべからず。九虫の内、而^{すなわ}ち六虫は六代に伝わり、三虫伝わらざる者は、蝟、蛔、寸白なり。六虫の内、或いは種毒を蔵して生じ、或いは親属習染して伝わる。疾の初め、精神恍惚し、気の候調わざるを覚ゆれば、切^{かため}は酒色を戒忌し、飲食を調節するに在り。如し或いは然ざれば、五心¹⁹煩燥²⁰し、心腎夜汗し、心乃ち恟悸す。此の如きこと十日にして、頓^{とみ}に骨瘦を成し、面黄し光潤す、此れ其の証なり。妄りに邪師を信じ、祈禳し福を求め、庸医薬を用い、歳時に延蔓して、方に病の重きを知る。苟しくも警戒するに非ずば、禍福反掌す。此の人死するの後、兄弟子孫、骨肉親属、綿綿と相い伝え、以て族を滅するに至る。

【口語訳】

伝屍癆瘵は、すべて心が病み、気がふさがり血がかたまり、虫となるのである。たいてい（適当でない）食事・飲酒・（女）色により、思い悩んで本来（の心）を失ない、結局こうなってしまう。たいてい虫が蠱²¹（腹中の虫）となるのは、血がかたまることによってであり、気がこれを養う。気血は胞^{えな}にあると正気となり、気が損なわれれば腹中のしこりとなり、かたまって心部にあれば虫となる。すべて心を正しくせず、因縁が起こすことを思い悩むことによる。三屍、九虫が引き起こす害を、治療する者は詳しく知らないといけない。九虫の中で、六虫は六代に伝変する。（九虫の中で）伝変しない三虫は、蝟、蛔、寸白である。六虫の中で、あるものは毒の原因をもって生じ、あるものは親類に伝染する。疾病の初期に、精神がぼんやりとし、気の調子がよくないと感じれば、酒色を避け、飲食を加減するのが大切である。また五心が煩燥し、心腎が寝汗を

19 「五心」は「左右の手掌と足底、胸中を合わせて五心という」。また「五心煩熱」は「証名。兩手足心、胸中に煩熱のあるものをいう。これは虚損癆瘵などの病によくみられる証候である」。

20 「煩燥」、煩躁に同じ。「胸中の熱と不安を煩といい、手足をばたつかせることを躁という」。「躁」は「傷寒論条弁」弁太陽病脈証并治上篇第一、二十九の注に「躁、手足疾動也」。

21 「蠱」、「説文解字」に「腹中蠱也」。また白川静『字通』は以下のようにもいう。「『説文』十三下に「腹中の蠱なり」とするが、蠱は人を惑わす呪儀であるから、『段注』に「腹、蠱に中^{あた}るなり」とよむべしという。卜辞に「貞^{まこと}ふ。王の尙（禍）あるは、隗^{わい}れ蠱ならざるか」とあり、巫女がその呪儀を行っていた。後世の媚^ま蠱左道といわれるものがそれである。漢代には巫蠱の変とよばれるような事件が頻発している。蠱法は、五月五日に、百虫を一器の中に入れて相食らわしめ、最後に残ったものにその呪能があるとされた。また人畜の類を埋めて呪詛する法があり、埋^ま蠱という。蠱霊には、自由に風行するものもあると考えられ、風蠱という。一般の虫類にも禍をなすものがあり、「周礼」秋官、庶氏に、「毒蠱を除くことを掌る」とみえる。

おこし、心が驚き動悸するようになる。このようなことが十日ほど続き、急に痩せて骨ばり、顔面は黄色くなりてかてかになる。これがその症候である。みだりに邪師を信じお祓いし福を求めたり、やぶ医者薬が薬を用いたりして、一年中流行して、まさに病が重いものであると知る。もしも警戒しないならば、禍福は掌を返すように変化する。その人が亡くなった後に、兄弟や子孫、骨肉親属に、綿綿と伝染し、ついには一族が消滅することになる。

大抵六蟲、一句之中、遍行四穴、周而復始。病經遇木氣而生、立春一日後方食起、三日一食、五日一退。方其作苦、百體有痛、蟲之食也、退即還穴醉睡、一醉五日、其病乍靜。俟其退醉之時、方可投符用藥、不然蟲熟於符藥之後、不能治也。一蟲在身中、遊十二穴、六蟲共占七十二穴。一月之中、上十日蟲頭向上、從心至頭遊四穴、中十日蟲頭向內、從心至臍遊四穴、下十日蟲頭向下、從臍至足遊四穴。若投符用藥、可知如紫蠶苗在汗中。蓋蟲性已通靈、切在精審。其或取蟲不補、即學淺妄行、徒費貲財、終無去病之理、可不悲哉。

【訓読】

大抵六虫、一句の中に、遍く四穴めくを行き、周りに始めかえに復る。病 木氣に遇うを経て生じ、立春の一日の後、方まさに食らい起はじむ。三日に一たび食ひ、五日に一たび退く。方に其れ苦を作し、百体に痛み有るは、虫の食らえばなり、退ぞけば即ち穴かえに還り酔いて睡り²²、一たび酔えば五日にして、其の病乍ち静まる。其の退ぞきて酔うの時を俟ちて、方に投符用薬す可し、然らずんば虫、符薬に熟るるの後、治すること能ざるなり。一虫身中に在れば、十二穴に遊び、六虫あれば共に七十二穴を占なむ。一月の中、上十日、虫頭 上に向かい、心従り頭に至りて四穴に遊び、中十日、虫頭 内に向かい、心従り臍に至りて四穴に遊び、下十日、虫頭 下に向かい、臍従り足に至りて四穴に遊ぶ。若し投符用薬すれば、紫の蚕の苗の如きの汗中に在るを知る可し。蓋し虫性 已に通靈すれば、切は精審に在るべし。其れ或いは虫を取りて補なわざれば、即ち学浅く妄行し、徒らに貲財を費やすも、終いに病を去るの理無し。悲まざる可けんや。

22 「酔」。「三戸酒」や三戸蟲が酔う記述が以下のようにある。明・徐光啓『農政全書』卷二十九、樹藝、果部上に「石榴、蓋取其房中多子之義。北人以榴子作汁、加蜜為飲漿、以代盃茗、甘酸之味、亦可取焉。道家書謂榴為三戸酒、言三戸蟲得此果則醉也」。

【口語訳】

たいてい六虫は、十日間で、すべての四穴に行き、巡回して始めにかえる。病は（春の）木気にあうのを経て生じる。立春の日の後、（虫は）食らいはじめる。三日に一度食らい、五日に一度（穴に）逆戻りする。この時に苦痛がおきる。身体のあらゆるところに痛みがあるのは、虫がそれを食らうからである。逆戻りすれば穴に還^{かえ}って酔って睡る。ひとたび酔うと五日間は、その病はたちまちおさまってくる。戻って酔っている時を待って、ちょうどその時に符を使い薬を用いなくてはいけない。さもなくば符薬に虫がなれた後は、治療することができない。一匹の虫が身中にあると、十二穴に行く。六匹いればあわせて七十二穴を自分の居所とする。一月のうち、初旬の十日間は、虫の頭は上に向かって、心から頭までの四穴に行き、中旬の十日間は虫の頭は内に向かって、心から臍にまでの四穴に行き、下旬の十日間は虫の頭は下に向かって、臍から足にまでの四穴に行く。もし符を使い薬を用いれば、紫の蚕の子のようなものが汗の中にあるのがわかるだろう。おそらく、虫の本性はすでに神霊に通じているから、大切なのは精しく審びらかにすることである。もし虫を取って補わなければ、学識が浅く妄りに行動して、無駄に散財したとしても、結局は病が治る道理もない。悲しむべきことだ。

師曰、治傳屍癆者、先須知正氣與毒氣並行、故臟腑有凝、即成蟲狀、遇陽日長雄、陰日長雌。其食先臟腑脂膏、故其色白、五臟六腑一經食損、即皮聚毛脫、婦人即月信不行、血脉皆損、不能榮五臟六腑也。七十日後食人血肉盡、故其蟲黃赤。損於肌肉、故變瘦劣、飲食不能爲膚、筋緩不能收持。一百二十日外、肉食盡故其蟲紫、即食精髓。傳於腎中食精、故其蟲色黑、食髓即骨痿不能起於床枕。諸蟲久即生毛、毛色雜花、鍾孕五臟五行之氣、傳之三人、即自能飛。其狀如禽、亦多品類、傳入腎經、不可救。治法之所載者、能利後其蟲色白、可三十日服藥補。其蟲黃赤、可六十日服藥補。其蟲紫黑、此疾已極、可百二十日服藥補。又云、蟲頭赤者、食患人肉可治。頭口白者、食患人髓、其病難治、只宜斷後。故經曰、六十日者、十得七八、八十日內治者、十得三四。過此以往、未知生全、但可爲子孫除害耳。今以六代所傳蟲狀病證詳著于後。

【訓読】

師曰く、伝屍癆を治する者、先ず須らく、正氣と毒氣と並行し、故に臟腑凝る有れば、即ち虫状と成り、陽日に遇れば雄^{あた}を長じ、陰日は雌を長ずるを、知るべし。其の食らうこと臟腑の脂膏を先にす、故に其の色は白なり。五臟六腑一たび食損を経れば、即ち皮

聚まり毛脱け、婦人は即ち月信²³行らず、血脈皆損われ、五臓六腑を榮²⁴すること能わざるなり。七十日の後、人の血肉を食らいて尽す、故に其の虫黄赤なり。筋肉を損う、故に瘦劣に変じ、飲食膚を為すこと能わず、筋緩みて収持すること能わざるなり。一百二十日の外、肉食食らい尽す。故に其の虫紫ならば、即ち精髓を食う。腎中に伝わりて精を食う、故に其の虫の色は黒なり、髓を食らわば即ち骨痿え床枕より起ること能わず。諸虫久しければ即ち毛を生じ、毛の色は雜花にして、鍾^{あつ}まりて五臓五行の気を孕み、之を三人に伝うれば、即ち自ら能く飛ぶ。其の状は禽の如くにして、亦品類多し。伝^{つたわ}りて腎経に入らば、救う可からず。治法の載する所は、能く利²⁵して後其の虫の色白なるは、三十日薬を服し補^{おきな}う可し。其の虫黄赤なるは、六十日薬を服し補う可し。其の虫紫黒は、此の疾已に極るに、百二十日薬を服し補う可し。又た云う、虫頭赤なる者は、患人の肉を食う、治す可し。頭口の白き者は、患人の髓を食う、其の病治し難し。只だ宜しく後を断つべし。故に經に曰く、六十日なる者は、十に七八を得、八十日の内に治する者は、十に三四を得。此を過ぎて以往は、未だ生^{いおう}の全きなるを知らず、但だ子孫の為に害を除く可きのみ。今六代伝うる所の虫状病証を以て、詳らかに後に著す。

【口語訳】

先生が次のようにおっしゃった。伝屍癩を治療する者が、最初に知らなくてははいけないのは、正の気と毒の気が同時に巡っている、そして臓腑^{しじり}に凝^{しじり}が有ると虫の形状となり、ちょうど陽日に生まれて育つと雄、陰日に生まれて育つと雌になることである。それ(虫)が食べるのは先ず臓腑の脂膏である。なのでその(虫の)色は白い。五臓六腑が(虫に)一度食われ損傷すれば、(人の)皮はしわがより毛は脱け、婦人は月経が巡らず、血脈はすべて損なわれて、五臓六腑に栄養をめぐらせることができない。七十日の後、(虫は)人の血肉を食らい尽す。なのでその虫の色は黄赤である。(人の)筋肉は損傷を受け、そのため痩せてはてしまい、飲食したものは筋肉となることができず、筋が緩んで収縮することができなくなる。百二十日より以降は、肉食を食べ尽してしまっている。なのでその虫が紫色であれば、精髓を食べる。腎の中にうつり精を食べるので、その虫

23 「月信」、月経。

24 「榮」。『漢』には「營に同じ」とあり、また「營衛」は「營気と衛気のこと。両気とも同一起源、水穀の精気の化したもの。營は脈中^{めく}を行き全身を栄養する作用がある。衛は脈外^{めく}を行き身体を防御するはたらきがある」とある。『黄帝内経靈枢』營衛生会第十八に「人受氣於穀、穀入於胃、以傳與肺、五藏六府、皆以受氣、其清者為營、濁者為衛、營在脈中、衛在脈外」。

25 「利」。『漢』に「とおす」とあり、滞りがないこと。『呂氏春秋』卷二十一、開春論第一に「飲食居處適、則九竅百節千脈皆通利矣」とある。他に下痢、泄瀉・帶下などを意味する場合もある。

の色は黒である。髓が食べられれば骨が痿え床について起きることもできなくなる。これらの虫は時間がたつと、毛が生え、その毛の色はさまざまに混っており、(虫が)集まり五臓の五行の気を帯びる。そして三人にうつり伝われば、自ら飛べるようになる。その形状は鳥類のようで、また種類も多く、うつって腎経に入ると、救い治すことができない。記載される治療法は、滞りの無い状態にした後、その虫の色が白であれば、三十日間薬を服用して補うべきである。その虫が黄赤色であれば、六十日間薬を服用し補うべきである。その虫が紫黒色であれば、この疾病はすでに極限であるから、百二十日間薬を服用し補うべきである。また次のようにもいわれる、虫の頭が赤色のものは、病人の肉を食べるので治療できる。頭と口の白いものは、病人の髓を食べ、その病は治りにくいので、後を断つのがよい。古い経に言われているが、六十日たったものは、十のうち七八が上手くいき、八十日の内に治療する者は、十のうち三四が上手くいく。これを過ぎたもので、生(命)が完全だったものをいままで知らない。ただ子孫のために害を除かねばならないだけである。そこで六代にわたり伝わる虫の形状・病証を、この後に詳細に示す。

第一代〔蟲狀病證遊食日治法〕²⁶

【訓読】

第一代〔虫状、病証、遊食日、治法〕

【口語訳】

第一代〔虫の形状・病証・遊食(動き食べる)日・治法〕

爲初癆病。²⁷ 謂初受其疾、不測病源、酒食加餐、漸覺羸瘦。治療蹉跎、乃成重病。醫人不詳其故、誤藥多死。

26 「今以六代所傳蟲狀病證詳著于後」に記載される「第一代」から「第六代」については、『正統道藏』洞真部、方法類、『無上玄元三天玉堂大法』(SN220) 卷二十四、「治尸勞法」にも「第一代」から「第六代」に関する記載がある。ただし『急救仙方』の記載とは異なる点が多く、「虫」の図は描かれていない。

27 「爲初癆病」、元・危亦林『世医得効方』、『無上玄元三天玉堂大法』などにこの部分はない。明・王肯堂『証治準繩』には同文がある。

【訓読】

初癆病と為す。謂えらく初めて其の疾を受けしとき、病源を測らず、酒食加餐するも、
 漸く羸瘦を覚え、治療蹉跎すれば、乃ち重病と成り、医人其の故を詳らかにせざれば、
 薬を誤りて多く死す、と。

【口語訳】

初期の癆病は、思うに、「はじめてこの疾に罹ったとき、病の原因を推測せず、酒食
 をしっかりと取るものの、だんだん痩せ衰えて、治療の時機を失えば、重病となってし
 まう。医者がその原因を詳らかにしなければ、薬を間違えて多くは死んでしまう」のだ。



図10-1

〔此蟲形如嬰兒。背上毛長三寸、在人身中。〕

【訓読】

〔此の虫の形は嬰兒の如し。背上に毛長さ三寸、人身中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は赤ん坊に似ている。背中に長さ三寸の毛があり、人の身体の中にある。〕



図10-2

〔此蟲形如鬼狀。變動在人臟腑中。〕

【訓読】

〔此の虫の形は鬼状の如し。変動して人の臓腑中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は、鬼の姿に似ている。変化し動いて人の臓腑の中にいる。〕



図10-3

〔此蟲如蝦蟇。變動在人臟腑中。〕

【訓読】

〔此の虫 蝦蟇の如し。変動して人の臓腑中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫は^{がま}蝦蟇に似ている。変化し動いて人の臓腑の中にいる。〕

已上諸蟲、在人身中、榮著之後、或大或小、令人夢寐顛倒、魂魄飛揚、精神離散、飲食不減、形容漸羸、四肢酸疼、百節勞倦、增寒壯熱、背膊拘急、頭腦疼痛、口苦舌乾、面無顏色、鼻流清涕、虛汗常多、行步艱辛、眼睛多痛。其蟲遇丙丁日、食起、醉歸心俞穴中、四穴輪轉、周而復始、俟蟲太醉方可醫、灸取出蟲後、用藥補心〔守靈散。〕

【訓読】

已上の諸虫、人の身中に在りて、榮著の後、或いは大となり或いは小となりて、人を

して夢寐に顛倒²⁸し、魂魄飛揚²⁹し、精神離散^{30・31}し、飲食減ぜざるも、形容漸く羸れ、四肢酸疼し、百節勞倦し、寒を増し熱を壮にし、背膊拘急し、頭腦疼痛し、口苦く舌乾き、面 顔色無く、鼻 清涕を流し、虚汗 常に多く、行歩 艱辛し、眼睛 痛むこと多からしむ。其の虫丙丁の日に遇えば、食らうこと起り、酔いて心愈の穴中に帰り、四穴に輪転し、周りに始めて復る³²。虫 太だ酔うを俟ちて方に医す可し。灸して取りて虫を出だすの後、薬を用いて心³³を補す〔守靈散³⁴。〕

【口語訳】

以上のこれらの虫は、人の身体中において、根をおろすと、あるものは大きく、あるものは小さくなり、人は眠っているとき悪い夢を見て、魂魄を飛揚させ、精神を離散させ、飲食は減らないのに、容姿をだんだんとやせ衰えさせ、手足をだるく疼かせ、体中の節々を疲労させ、寒気を増し熱を壮んにさせ、背や腕を強ばらせ、頭腦を疼き痛ませ、口を苦く舌を乾かせ、顔色を無くさせ、すんだ鼻水をながさせ、虚汗をいつも出させ、歩行困難にさせ、眼をたいへん痛ませる。この虫は（五行の火に属する）丙丁の日になると食べはじめ、酔って心愈穴の中に帰る。四穴を移り動いて、巡回して始めて帰る。虫がひどく酔うのを待って、その時に治療しなくてははいけない。灸をして虫を取り出した後、薬を用いて心を補う〔守靈散。〕

28「顛倒」は、「寝返りをうつ」の意とも考えられるが、後に続く第二代の記載に「夜夢不祥、與亡人為伴侶」とあるため、ここは「不吉」と解した。

29「魂魄飛揚」は、『黄帝内経靈樞』本神篇九に、「黄帝問於岐伯曰、凡刺之法、必先本於神。血、脈、營、氣、精、神、此五藏之所藏也。至其淫泆離藏、則精失、魂魄飛揚、志意怱亂、智慮去身者、何因而然乎。天之罪與。人之過乎。」とある。

30「魂魄飛揚、精神離散」は、『脈經』卷六に「邪哭使魂魄不安者、血氣少也。血氣少者属于心、心氣虛者、其人則畏、合目欲眠、夢遠行而精神離散、魂魄妄行。』『金匱要略』にも同じ文が見える。また『医宗金鑑』は、ここに注して「邪哭、謂心傷之人、無故而哭也。邪哭則使人魂魄不安、心之血氣少也。血氣少而心虛、則令人畏。合目欲眠、則夢遠行、此是精神離散、魂魄妄行也。」とある。

31「黄帝内経素問」宣明五氣篇第二十三に「五藏所藏、心藏神、肺藏魂、肝藏魂、脾藏意、腎藏志、是謂五藏所藏」、また『難經』三十四難に「五藏有七神、各何所藏耶。然藏者、人之神氣所舍藏也。故肝藏魂、肺藏魂、心藏神、脾藏意與智、腎藏精與志也。」とあり、五臓がそれぞれ神を舍すとされる。

32 四穴を巡って元に戻るとされている。『論語』陽貨に「四時行焉。百物生焉。」とあり、四季が巡り万物が生長するとされている。

33「心」は、五行の火に属する。

34「守靈」は、神名、五臓の心の神名。『太上黄庭内景玉経』心神章第八に、「心神丹元字守靈、肺神皓華字虛成、肝神龍烟字含明、鬱鬱導烟主濁清。腎神玄冥字育嬰、脾神常在字魂停、膽神龍曜字威明」とあり、梁丘子註『黄庭内景玉経註』では「内象論也。心為臟腑之元、南方火之色、栖神之宅、故曰守靈也」と注がある。また「守靈散」は、卷十一に処方記載されている。

第二代

爲覺癆病。³⁵ 謂傳受此病、已覺病者、患人乃自知。夜夢不祥、與亡人爲伴侶、醒後全無情思、昏沉似醉、神識不安、所食味輒成患害、或氣痰發動、風毒所加、四體不和、心胷滿悶、日漸羸瘦、骨節枯乾、或嘔酸水、或是醋心、唇焦口苦、鼻塞胷痛、背膊酸疼、虛汗常出、腰膝刺痛。如此疾狀、早須醫治、過時難療、致傷性命。

【訓読】

癆病を覚ゆと爲す。謂く、此の病を伝受し、已に病を覚ゆれば、患人乃ち自ら知れり。夜不祥を夢み、亡人と伴侶³⁶と爲るも、醒めて後に全く情思無く、昏沈すること酔うがごとく似く、神識安んぜず、食味する所、輒ち患害を成し、或いは気痰發動し、風毒加うる所、四体和せず、心胸滿悶し、日び漸く羸瘦し、骨節枯乾し、或いは酸水を嘔き、或いは是れ醋心し、唇焦き口苦く、鼻塞ぎ胸痛み、背膊酸疼し、虚汗常に出で、腰膝刺痛すと。此如き疾狀あらば、早に須らく医治すべし、時を過ぐれば療し難く、性命を傷るを致す。

【口語訳】

癆病と認識するのは、思うに、「この病を伝え受けて、すでに病を感知すればその患者は自分自身で（病と）認識できるのだ。夜に不祥な夢を見て、死者と伴侶となるが、目ざめた後に思いは全くなく、ぼんやりしているのは酔ったようであり、精神が安定せず、食べたものが害となり、あるものは咳き込んで痰がでて、さらに風毒が加わって、四体は調和せず、心胸が膨満して悶え、日ごとに痩せ衰え、関節は萎縮し、あるものは酸水（胃液）を吐き、あるものは胸焼けをおこし、唇はかわき口は苦く、鼻が詰まり胸が痛み、背や上腕はだるく痛み、虚汗（冷や汗）が常に出て、腰膝が刺すようにずきずき痛む」のだ。このような症状があれば、早く治療しなくてはいけない。時間がたてば治療は困難になり、生命に危険が及ぶ。

35 「爲覺癆病」、元・危亦林『世医得効方』、『無上玄元三天玉堂大法』などにこの部分はない。

36 「鬼交」のこと。『諸病源候論』卷四、婦人雜病諸候に「與鬼交通。人稟五行秀氣而生、承五臟神氣而養。若陰陽調和、則臟腑強盛、風邪鬼魅不能傷之。若攝衛失節、而血氣虛衰、則風邪乘其虛、鬼干其正。然婦人與鬼交通者、臟腑虛、神守弱、故鬼氣得病之也」。



図10-4

〔此蟲形如亂絲。長三寸許、在人臟腑中。〕³⁷

【訓読】

〔此の虫の形、乱糸の如し。長さ三寸許^{ほか}り、人の臓腑の中に在り。〕

【口語訳】

〔此の虫の形状は乱れた糸に似ている。長さは三寸ほどで、人の臓腑の中にいる。〕



図10-5

〔此蟲形、如蝦蟹。在人臟腑中。〕³⁸

【訓読】

〔此の虫の形、蝦蟹の如し。人の臓腑の中に在り。〕

37 『世医得効方』では、「此蟲如亂髮、可長三寸、或似守宮。」となっているが、「^{まもり}守宮」の様な図は記載されていない。

38 『世医得効方』では、「此蟲形如蝦、在人臟腑中」。四庫全書『世医得効方』ではこの部分はない。

【口語訳】

〔この虫の形状は蝦や蟹に似ている。人の臓腑の中にいる。〕



図10-6

〔此蟲形、如蜈蚣。或似手弓。在人臟腑中。〕³⁹

【訓読】

〔此の虫の形、蜈蚣の如し。或いは手弓に似る。人の臓腑中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状はむかでに似ている。または手弓に似ていて人の臓腑の中にいる。〕

已上諸蟲、在人身中、令人氣喘、唇口多乾、咳嗽增寒、心煩壅滿、毛髮焦落、氣脹吞酸、津液漸衰、次多虛渴、鼻流清水、四肢將虛、臉赤面黃、皮膚枯瘦、腰膝無力、背脊酸疼、吐血唾膿、語言不利、鼻塞頭痛、胃膈多痰。重者心悶吐血、僵仆在地、不能自知。其蟲遇庚辛日、食起醉歸肺俞穴中。四穴輪轉、周而復始、俟蟲大醉方可治醫。取出其蟲、補肺則差〔虛成。〕

【訓読】

已上の諸虫、人身中に在りて、人をして氣喘⁴⁰し、唇口多く乾き、咳嗽増寒⁴¹し、心

39 『世医得効方』では、「此蟲形如蜈蚣、在人臟腑中」。

40 「氣喘」は、精神的素因による喘をいう。多くは七情により傷られ、氣機が鬱結しておこる。症状は呼吸急促して声なく、甚だしければ鼻を広げ息をする。あるいは怒り、イライラ、驚き悩むなどを伴うことがある。

41 「増寒」は、「外に寒戦があり、内に煩熱がある症状。これは、熱邪が内伏し、陽気がはばまれて外に達することができないためにおこる」。あるいは「悪寒に同じ」。

煩⁴²壅満し、毛髮焦落し、気脹⁴³呑酸し、津液漸^{しだ}いに衰え、次いで多く虚渴し、鼻清水を流し、四肢将に虚し、臉赤く面黃ばみ、皮膚は枯瘦し、腰膝は力無く、背脊酸疼し、血を吐き膿を唾し、語言利ならず、鼻塞ぎ頭痛み、胸膈に痰を多からしむ。重き者は心悶え血を吐き、僵仆して地に在りて、自ら知ること能わず。其の虫、庚辛の日に遇わば、食らい起りて酔いて肺俞の穴の中に帰る。四穴を輪転し、周りて始めに復^{かえ}る。虫大いに酔うを俟^まちて方に治^い医^やす可し。其の虫を取り出し、肺を補わば則ち差^いゆ〔虚成⁴⁴。〕

【口語訳】

以上のこれらの虫は、人の身体の中において、人に次のような症状を引き起こす、喘ぐ呼吸をし、唇や口はひどく乾き、咳嗽し増寒し、心中を煩悶し壅^ふさぎ充滿し、毛髮は抜け落ち、気脹し呑酸し、津液はしだいに枯れ、そしてひどく虚して喉が渴き、澄んだ鼻水が出て、四肢は虚し、臉^{ほお}は赤く面^{かお}は黄色となり、皮膚は枯瘦し、腰膝は力無く、背中はだるく痛み、吐血し膿を唾^はき、口が利けなくなり、鼻は塞がり頭痛し、胸膈に痰を多くさせる。重症のものは心^{しん}が悶え血を吐き、地面に倒れ、意識を失う。この虫は庚辛の日になると、食べはじめ、酔って肺俞穴の中に帰る。四穴を順番に巡り、周って始めにもどる。虫が大いに酔うのを待って、ちょうどその時に治療しなくてはいけない。その虫を取り出して、肺を補えば治る〔虚成散。〕

第三代

爲傳屍癆病。⁴⁵謂傳受病、人自尋得知之。日漸消瘦、頓改顔容、日日恹惶、夜夜憂死。不遇良醫、就死伊邇。

【訓読】

伝屍癆病と爲る。謂えらく、病を伝受し、人自ら尋^{ついで}で之を知るを得。日び漸^{しだ}いに消瘦

42「心煩」は、心中が煩燥、煩悶して、胸が苦しく感じられること。多くは内熱によってひきおこされる。

43「気脹」は、七情の鬱結により気道が壅塞しておこる脹病のこと。症状は腹部の脹満。四肢の肉がおち、飲食の減少などをあらわす。

44「虚成」は、五臓の肺の神名。前掲注34「守靈」を参照。梁丘子註『黄庭内景玉経註』に「肺為心之華蓋。皓、白也、西方金之色、肺色白。其質輕虚、故日虚成色」と注がある。本書卷十一、上清紫庭追癆仙方品には、「虚成散」の処方がある。

45「爲傳屍癆病」、元・危亦林『世医得効方』、『無上玄元三天玉堂大法』などにこの部分はない。

し、^{とみ}頓に^{あらた}顔容改まり、日々に^{せいこう}悽惶し、夜夜に死を憂う。良医に^{すなわ}遇わざれば、^{これちか}就ち死すること伊邇しと。

【口語訳】

伝屍癩病になった時は、思うに、「病を伝わり受けると、人は、間もなく自分自身でこれを知ることになる。日ごとに痩せ、急に顔かたちが変わり、毎日わずらい悩み、毎夜死を憂う。良医にあわなければ、死が近い」のだ。



図10-7

〔此蟲形、如蚊蠅。俱遊臟腑中。〕

【訓読】

〔此の虫の形、蚊蠅の如し。俱に^{とも}臟腑中に遊ぶ。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は、蚊・蟻に似ている。ともに臟腑の中を動きまわる。〕



図10-8

〔此蟲形如蛻螂。大如碎血片。在五臟中。〕

【訓読】

〔此の虫の形、^{きょうろう}蛻螂の如し。大いさは碎血片の如し。五臟中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は、蛻螂（フンコロガシ）⁴⁶に似ている。大きさは砕けた血片のようである。五臟の中にいる。〕



図10-9

〔此蟲形如刺蝟。在人腹中⁴⁷。〕

【訓読】

〔此の虫の形、刺蝟（しい）の如し。人の腹中に在り。〕

【口語訳】

〔此の虫の形状は刺蝟（ハリネズミ）⁴⁸に似ている。人の腹中にある。〕

46 「蛻螂」、加納喜光『動物の漢字語源辞典 新装版』、東京堂出版、2021年、p.77は、「甲虫目コガネムシ科（Scarabaeidae）のうち、食糞類の昆虫、特に *Catharsius molossus*（タイワンダイコクコガネ、中国名保銘螂）を意味する」としている。

47 「腹中」、『普濟方』では「三焦」となっている。

48 「刺蝟」、加納喜光『動物の漢字語源辞典 新装版』、東京堂出版、2021年、p.22では、「蝟」は「猬」。食虫目ハリネズミ科の哺乳類 *Erinaceus europaeus*（ハリネズミ）の異体字とし、別名に「刺猬」を挙げる。

已上諸蟲、在人身中、令人三焦多昏、日常思睡、嘔吐苦汁、或吐清水、或甘或苦、粘涎常壅、腹脹虛鳴、臥後多驚、口鼻生瘡、唇黑面青、日漸消瘦、精神恍惚、魂魄飛揚、飲食不消、氣咽聲乾、目多昏淚⁴⁹。其蟲遇庚寅日、食起醉歸厥陰穴中、四穴輪轉、周而復始、俟蟲大醉方可治、取蟲後補氣多差。

【訓読】

已上の諸虫、人身中に在りて、人の三焦をして昏を多くし、日び常に睡らんことを思い、苦汁を嘔吐し、或いは清水を吐き、或いは甘く或いは苦し、粘涎常に壅ぎ、腹脹り虚鳴し、臥せし後、多く驚し、口鼻に瘡を生じ、唇は黒く面は青く、日ごと漸いに消瘦し、精神恍惚し、魂魄飛揚し、飲食不消し、氣咽び声乾き、目昏み涙多からしむ。其の虫は庚寅の日に遇わば、食い起め酔いて厥陰の穴中に帰る。四穴に輪転し、周りを始めて復る。虫大いに酔うを俟ちて、方に治す可し。虫を取りて後、気を補えば多く差ゆ。

【口語訳】

以上のこれらの虫は、人の身体の中において、人の三焦に作用して、多くぼんやりとさせ、日々睡りたいと思わせ、苦汁を嘔吐させ、また清水を吐かせ、甘かったり苦かったり、粘った涎で常に壅がり、腹が脹って腹鳴し、臥した後に多く驚⁵⁰し、口や鼻に瘡を生じさせ、唇は黒くなり顔面を青くさせ、日ごと漸いに痩せ衰えさせ、精神を恍惚とさせ、魂魄を飛揚させ、飲食を消化させず、氣は咽び、声はかれ、目はぼんやりとし涙を多くながさせる。その虫は庚寅の日になれば、食いはじめ、酔って厥陰の穴中に帰る。四穴を順に回って移り、めぐって始めにもどる。虫が大変酔ったのを待って、ちょうどそのときに治療しなくてはいけない。虫を取った後、気を補えば多くは治る。

49 「目多昏淚」は、『普濟方』では「氣咽氣乾、汗出如油、目昏多淚」となっている。この方が文章としてわかりやすい。ここではこれに従った。

50 「驚」は、清・張璐『張氏医通』卷六 神志門 驚に「夫驚雖主於心。而肝膽脾胃皆有之。驚是火熱爍動其心。心動而神亂也。若因内氣先虛。故觸事易驚。或卒然聞響大聲。目擊異物。遇險臨危。皆使人有惕惕之狀也。驚則氣亂。鬱而生火 生涎。涎與氣搏。變生諸證。或短氣。或自汗。或眠多異夢。隨即驚覺」とある。

第四代



図10-10

〔此蟲形如亂絲。在人腹臟中。〕⁵¹

【訓読】

〔此の虫の形乱糸の如し。人の腹臓の中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は乱れた糸に似ている。人の腹臓の中にいる。〕



図10-11

〔此蟲形如猪肺。在人腹中。〕⁵²

【訓読】

〔此の虫の形、猪肺の如し。人の腹中に在り。〕

51 『世医得効方』では「臟腑中」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

52 『世医得効方』では「臟腑中」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

【口語訳】

〔この虫の形状は、ブタの肺に似ている。人の腹中にある。〕



図10-12

〔此蟲形如蛇虺。在人五臟中。〕⁵³

【訓読】

〔此の虫の形、蛇虺の如し。人の五臓中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は、ヘビ・マムシに似ている。人の五臓の中にある。〕

已上諸蟲、在人身中、令人臟腑虛鳴、嘔逆傷中、痲癖氣塊、增寒壯熱、肚大筋生、腰背疼痛、或虛或瘦、瀉利無時、行履困重、四肢憔悴、上急氣喘、口苦舌乾、飲食及水過多、要喫酸醜之物。其蟲遇戊己日、食起醉歸脾俞穴中。四肢輪轉、周而復始。俟蟲大醉方可治。取出蟲後、補脾爲瘥〔魂停。〕

【訓読】

已上の諸虫、人の身中に在りて、人をして臟腑を虚鳴⁵⁴し、嘔逆し中を傷り、痲癖⁵⁵

53 『世医得効方』では「此蟲形如蛇、在人臟腑中」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

54 「虚鳴」は、『世医得効方』卷八、虚損に「北亭円、治脾元氣弱、久積陰、冷心腹、……噫氣吞酸、噦逆、惡心、腹中虚鳴、大便洩利、……」とある。また『普濟方』卷二十一、脾臟門、脾臟冷氣腹内虚鳴には、「夫、脾為中州、腐化水穀、裨諸臟腑。若脾虚、冷氣与正氣相擊、則令腹内虚鳴、甚則腹痛不利……」とある。

55 「痲癖」、『外台秘要方』卷十二、療癖方に「多飲水漿、亦不能為病、若攝養乖方、則三焦痞隔、三焦痞隔、則腸胃不能宣行、因飲水漿便令停滯不散、更遇寒氣積聚而成癖。癖者謂僻側在於兩脅之間、有時而痛是也。」また「寒癖之為病、是飲水停積脅下、痲強是也。因遇寒、即痛、所以謂之寒癖。」とある。

気塊し、増寒壯熱し、肚を大にし筋生じ、腰背疼痛し、或いは虚し或いは瘦し、瀉利時無く、行履困重し、四肢憔悴し、上急气喘し、口苦く舌乾き、飲食及び水過ぐること多く、酸鹹の物を喫せんと要めしむ。其の虫戊巳の日に遇わば、食い起め酔いて脾愈穴の中に帰る。四肢に輪転し、周りに復る。虫大いに酔うを俟ちて方に治す可し。虫を取り出だせし後、脾を補なわば瘥ゆると為す〔魂停⁵⁶。〕

【口語訳】

以上の虫は、人の身中にいて、人の臓腑を虚鳴させ、嘔逆させ、中（焦）をそこなわせ、痲痺させ気を塊まらせ、増寒、壯熱させ、腹部をふくらませ筋ばらせ、腰背を疼痛させる。あるいは虚しあるいは瘦せて、時を構わず下痢し、日常生活は困難となり、四肢は瘦せ衰え、気が上ってきて喘ぎ、口は苦く舌は乾き、飲食や水の摂取が過多となり、酸っぱい物や塩辛い物を食べたくなる。この虫は（五行の土に属する）戊巳の日に、食いはじめ酔って脾愈穴の中に帰る。四肢を順番に回り、めぐって始めにかえる。虫が大いに酔った時を待って、ちょうどその時に治療しなくてはいけない。虫を取り出だした後、脾を補なえば瘥える〔魂停散。〕

第五代



図10-13

〔此蟲形如鼠、似小瓶、渾無表裏背面。⁵⁷〕

56 「魂停」、五臓の脾の神名。前掲注34「守靈」を参照。梁丘子註『黃庭内景玉經註』には「脾、中央、土位也、故日常在、即黃庭之官也。脾磨食消、神康力壯、故曰魂停」と注がある。また本書卷十一、上清紫庭追癆仙方品に、「魂停散」の処方載る。

57 『世医得効方』では「此蟲形如鼠、在人身中、俱游臟腑」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

【訓読】

〔此の虫の形、鼠の如く、小さき瓶の似く、渾て表裏背面無し。〕

【口語訳】

〔此の虫の形状は、鼠のようである。また小さい瓶に似ている。まったく表裏前後の区別がない。〕



図10-14

〔此蟲形、如有頭無足、有足無頭。⁵⁸〕

【訓読】

〔此の虫の形、頭有りて足無く、足有りて頭無きが如し。〕

【口語訳】

〔此の虫の形状は、頭は有るが足は無い、足は有るが頭は無いようなものである。〕



図10-15

58『世医得効方』では「此蟲形或有足無頭、或有頭無足」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

〔此蟲變動、形如精血片。在於陽宮。⁵⁹⁾〕

【訓読】

〔此の虫 變動して、形 精血片⁶⁰⁾の如し。陽宮⁶¹⁾に在り。〕

【口語訳】

〔此の虫は 変化して動いて、形状は精血片のようである。陽宮にいる。〕

已上諸蟲、入肝經而歸腎、得血而變更也、令人多怒氣逆、筋骨拳攣、四肢解散、唇黑面青、增寒壯熱、腰背疼痛、起坐無力、頭如斧斫、眼晴時痛、翳膜多淚、背膊刺痛、力乏虛羸、手足乾枯、臥著床枕、不能起止、有似風中、肢體頑麻、腹內多痛、眼見黑花、忽然倒地、不省人事、夢寐不祥、覺來遍體虛汗、或有面色紅潤如平時者、或有通靈而言未來事者。其蟲遇癸未⁶²⁾日、食起醉歸肝穴中。四穴輪轉、周而復始。俟蟲大醉、方可醫救。取蟲出後、補肝乃得瘥〔金明。〕

【訓読】

已上の諸虫、肝經に入りて腎に帰⁶³⁾し、血を得て変更するなり、人をして多く怒し氣逆し、筋骨拳攣し、四肢解散し、唇黒く面青く、増寒壯熱し、腰背疼痛し、起坐力無く、

59 『世医得効方』では「此蟲形如精血變動、在人臟腑、或在陽宮」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

60 「精血片」は、虞搏『医学正伝』卷一、傷寒に「東陽杜世良乃兄、三月間得傷寒證、惡寒發熱、小便淋瀝、大便不行。初得病時、莖中出小精血片、如棗核大」とある。また「精血」は、隋・巢元方『諸病源候論』卷四、虚勞病諸候下、虚勞精血出候に、「此勞傷腎氣故也。腎藏精、精者血之所成也。虚勞則生七傷六極、氣血俱損、腎家偏虚、不能藏精、故精血俱出也」とある。つまり虚勞により腎が傷れ（陰）莖より精血（片）が出るとされる。

61 「陽宮」は不詳。前掲注60によれば「精血片」は腎が虚し（陰）莖より出るといふ。これにより「陽宮」は腎（臟）かもしれない。あるいは心（臟）かもしれない。五行の火（陽）に属する臟は「心」であり、さらに血は脈のなかにあり「心」に属している。これは唐・王冰次註、宋・林億等校正『黄帝内経素問』卷三、六節藏象論篇第九に、「諸血者、皆屬於心。〔血居脉内、屬於心也。八正神明論曰、血氣者、人之神。然神者心之主、由此故諸血皆屬於心也〕」とあることによる。またあるいは「腦」かもしれない。これは『世医得効方』において「在人臟腑、或在陽宮」とされることから、臟腑とは異なる寄恒の腑とされる「腦」を示している可能性もある。なお道家の唱える身体内にあるとされる「九宮」にも「陽宮」に該当するであろうものは見当たらない。

62 「癸未」、未は五行の土。『世医得効方』では、「甲乙」（五行では、木に属する）となっている。

63 「帰」は作用が臟腑経脈と関連があることをいう。例えば、「帰経」は、『漢』では「薬物の作用を臟腑経脈に関連づけたものであり、その薬物がどの臟腑経脈の病変に治療効果があるかを説明している」とある。

頭は斧^きもて斫^きるが如く、眼睛時に痛み、翳膜⁶⁴し多く涙し、背膊^{はく}刺痛し、力乏しく虚羸し、手足乾枯し、臥して床枕に著き、起止⁶⁵すること能わず、風中たる似き有り、肢体頑麻し、腹内多く痛み、眼黒花⁶⁶を見、忽然として地に倒れ、人事を省りみず、不祥を夢寐^{むび}し、覚め来りて遍く体に虚汗せしむ。或いは面色の紅潤なること平時の如き者有り、或いは通靈して未来の事言う者有り。其の虫癸未の日に遇わば、食^はい起^はじめ酔いて肝愈穴中に帰る。四穴輪転し、周^{めぐ}りて始めに復る。虫大いに酔うを俟ちて、方に医やして救う可し。虫を取りて出だせし後、肝を補わば乃ち瘥ゆるを得。〔金明⁶⁷。〕

【口語訳】

以上のこれらの虫は、肝経に入り腎に帰し、血を得て変化する。(これらの虫は)人を怒りやすくさせ、氣逆させ、筋骨をこわばりひきつらせ、四肢(のうごきを)をばらばらにさせ、くちびりは黒く顔面は青くさせ、増寒し壮熱させ、腰背を疼痛させ、起ち居ふるまいに力がはいらず、頭が斧で斫られるようで、目を時々痛ませ、翳膜を生じさせ、涙を多く出させ、背や上腕を刺すように痛ませ、力がぬげ痩せ衰えさせ、手足をカサカサにさせ、床に伏せるようさせて、起き上がれなくさせ、中風のような状態にさせ、肢体を麻痺させ、腹中をたいへん痛ませ、眼には黒い点が見え、忽然として地に倒れ、人事不省とさせ、不吉な夢を見させ、目覚めた時に全身に虚汗(冷や汗)を出させる。あるいは顔色が普段通り紅くつややかな者もある、あるいは靈に通じて(神がかって)未来の事を言う者もある。この虫は癸未の日になると、食いはじめ酔うと肝愈穴中に帰る。四穴を順にまわり、めぐって始めにもどる。虫が大変酔うのをまって、ちょうどその時に治療して救わなければならない。虫を取り出した後、肝を補えば治る。〔金明散。〕

64「翳膜」は、次のようにいわれる。『医心得効方』卷十六、眼科、肝臟積熱二十四に「眼先患赤痛腫疼痛、自淚澁難開、忽生翳膜腫、或初患一日不見、以致兩目齊患。此因作勞用力、肝腑熱勞」。

65「起止」は、廁のこと。『法苑珠林』卷第九十四に「上廁有二處。一者起止處。二者用水處」。

66「黒花」、今でいう黒内障か。呉謙『眼科心法要訣』『内障總名歌』に「黒水者、黒水凝翳、亦名黒花翳」。

67「金明」は、おそらく元來「含明」であろう。「含明」は五臓の肝の神名。前掲注34「守靈」を参照。梁丘子註『黃庭内景玉經註』には「肝位木行、東方青龍之色也。於藏主目。日出東方、木生火、故曰含明」と注がある。本書卷十一には「金明散」の処方があり明・王肯堂『証治準繩』卷二十、傳尸癆にも載る。また宋・張銳『鷄峰普濟方』の「含明散」は、これと同一の処方である。

第六代〔此代蟲有翅足全者、千里傳疰。所謂飛屍。不以常法治也。〕

【訓読】

第六代〔此の代の虫翅足の全き者有りて、千里に疰^{しゆ}⁶⁸を伝う、所謂飛屍^{いわる}⁶⁹なり。常法を以ては治せざるなり。〕

【口語訳】

第六代〔この世代の虫は 翅や足を全て備えているものがあり、千里に疰を伝染させる。所謂、飛屍である。常法では治せない。〕



図10-16

〔此蟲形如馬尾。有兩條一雌一雄。〕

【訓読】

〔此の虫の形、馬尾の如し。兩条有りて一は雌 一は雄なり。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は、馬の尾に似ている。二匹いて一匹は雌、一匹は雄である。〕

68 「疰」は注に通じる。宋・陳言『三因極一病証方論』卷十、「勞瘵叙論」に「以疰者注也、病自上注下、與前人相似、故曰疰」とあり、この『急救仙方』でも後の「蘇遊論」に同様の記載を載せる。また隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候には「凡注之言住也、謂邪氣居住人身内、故名爲注。此由陰陽失守、經絡空虛、風寒暑濕勞倦之所爲也。其傷寒不時發汗、或發汗不得真汗、三陽傳於諸陰、入於五藏、不時除差留滯、或宿食冷熱不調、邪氣流注、或乍感生死之氣、卒犯鬼物之精、皆能成此病。其變狀多端、乃至三十六種、九十九種、而方不皆顯其名也」とある。

69 「飛屍」は、隋・巢元方『諸病源候論』卷二十三、飛尸候に「飛尸者、發無由漸、忽然而至、若飛走之急疾、故謂之飛尸。其狀心腹刺痛、氣息喘急、脹滿、上衝心胸者是也」とある。



図10-17

〔此蟲形、如龜螿。在人五臟中。⁷⁰⁾〕

【訓読】

〔此の虫の形、亀螿の如し。人の五臓中に在り。〕

【口語訳】

〔この虫の形状は、^{かめすっぽん}亀螿に似ている。人の五臓の中にいる。〕



図10-18

〔此蟲形如爛面。或長或短。或如飛禽。⁷¹⁾〕

【訓読】

〔此の虫の形、爛面の如し。或いは長く或いは短し。或いは飛禽の如し。〕

70 『世医得効方』では「此蟲形如螿、在人臟腑」。四庫全書『世医得効方』にこの部分はない。

71 『世医得効方』では「此蟲形如爛麵、或長或短」。

【口語訳】

〔この虫の形状は、煮崩れた（小麦粉を練った）麺のようである。長いのが短いがある。あるいは飛禽（飛ぶ鳥）に似ている。〕

已上諸蟲、在人身中、居於腎臟、透連脊骨。令人思食、百物要喫⁷²、身體尪羸腰膝無力、髓寒骨熱、四體乾枯、眼見火生、或多黑暗、耳内虚鳴、陰汗燥痒、冷汗如油、夢多鬼交、小便黄赤、醒後昏沉、臍下結硬、或奔心胃、看物如艷、心腹悶亂、骨節疼痛、食物進退、有時喘嗽。其蟲遇丑亥日、食起醉歸腎俞穴中。四穴輪轉、周而復始、俟蟲大醉可醫治、取蟲後、補腎填精瘥〔育嬰散。〕

【訓読】

已上の諸虫、人身中に在りて、腎臓に居り、脊骨^{とほ}を透り連なる。人をして食うを思い、百物喫^{くら}うを要め、身体尪羸^{もと}し、腰膝力無く、髓寒^{おうえい}骨熱^おし、四体乾枯し、眼火の生ずるを見、或いはよく黑暗し、耳内虚鳴し、陰汗⁷⁵燥痒し、冷汗油の如く、夢に多く鬼交⁷⁶し、小便黄赤し、醒むる後昏沈し、臍下結硬し、或いは心胸^{はや}を奔くし、物を看ること艷あるが如く、心腹悶乱し、骨節疼痛し、物を食ふこと進退し、時に喘嗽有らしむ。其の虫丑亥の日に遇わば、食らい起め酔いて腎俞穴中に帰る。四穴に輪転^{めぐ}し、周りて始めに復る。虫の大いに酔うを俟ちて医治す可し。虫を取りて後、腎を補い精を填たせば瘥ゆ。〔育嬰散⁷⁷。〕

72 「百物要喫」、『世医得効方』では、「是物要餐」。

73 「髓寒」、『聖濟総録纂要』卷十六、腎臟門、腎虚に「『論』曰腎主水、受五臟六腑之精而藏之。若腎氣虚弱、則足少陰之經不利。故其症、腰背痠疼、小便滑利、臍腹痛、耳鳴、四肢逆冷、骨枯髓寒、足胫力劣、不能久立」。

74 「骨熱」は、消耗性の熱の一種。『普濟方』卷二百五十八、食治門、食治骨蒸勞に「夫骨蒸之病而多異名、為療皆同一體。丈夫以勞損為宗、婦人以血氣為本。起於腎虚所至、故云陰氣不足、陽必湊之。血氣不榮、骨髓枯竭。腎主於骨、以先從骨熱、故曰骨蒸。又大都此病起於無端、不問老小男女、皆染斯病。嬰孩之流、傳注更甚。其狀心胸煩滿、骨節疼痛、頰口乾、或寒或熱、四肢無力、毛髮乾焦、咳頭疼、精神昏悶、多卧少起、夢與鬼交、驚悸不安、時時盜汗、毒氣傳及五臟、日漸羸瘦、宜以食治之」。

75 「陰汗」、冷や汗。或いは陰部の汗。ここでは冷や汗、明張介賓『景岳全書』卷十二、汗証、「陰汗者、冷汗也」とある。

76 「鬼交」は、『諸病源候論』卷四十、夢与鬼交通候に「夫臟虚者喜夢。婦人夢与鬼交、亦由腑臟氣弱、神守虚衰、故乘虚因夢与鬼交通也」とある。これについては孫理氏の「『鬼交』と繋がる「注」病：『病源論』を中心として」、『東洋古典學研究』46、2018年、pp.1-15なども参照されたい。

77 「育嬰」は、五臟の腎の神名。前掲注34「守靈」を参照。梁丘子註『黃庭内景玉經註』には「腎屬水、故曰玄冥。腎精為子、故曰育嬰也。」と注がある。本書卷十一には「育嬰散」の処方載る。

【口語訳】

以上これらの虫は、人の身体の中、腎臓にいて、脊骨をとおりつらなっている。人に食事をしたいと思わせ、様々なものを食べたいと思わせ、身体をやせ衰えさせ、腰膝の力が抜け、髓寒、骨熱にさせ、四体をかさかさにし、眼に火が生じるのが見え、あるいはひどく暗くし、耳鳴りをさせ、陰汗をださせてカサカサで痒くなり、冷汗は油のようにて、夢に多く鬼交することをおこさせ、小便を黄赤色にさせ、醒めた後はぼんやりとさせ、臍下を結硬させ、あるいは心胸をどきどきさせ、物（人）をみてなまめか美しく感じさせ、心腹を悶え乱させ、骨節を疼痛させ、食事が進んだり進まなかったりさせ、時には喘嗽があるようにさせる。この虫は、丑亥の日になると、食べはじめ酔うと腎俞穴の中に帰る。四穴を順番にまわり、めぐって始めにかえる。虫が大変酔うのを待って治療しなくてはいけない。虫を取った後、腎を補い精をみたせば治る。〔育嬰散。〕

蘇遊論

【訓読】

蘇遊⁷⁸論⁷⁹

【口語訳】

蘇遊論

論曰、大抵傳屍之候在心。胃脇滿悶、背膊煩痛、兩目不明、四肢無力、雖欲寢臥、睡常不寐、脊脊急痛、腰膝酸疼、多臥少起、狀如佯病、每至早旦、精神尚存、有如無病、日午之後、四體微熱、面無顔色、喜見人過、常懷忿怒、纔不稱意、即多嗔恚、行立脚弱、夜臥盜汗、夢與鬼交、或見先亡、或多驚怖、有時氣息、有時咳嗽、雖思飲食、不能多食、死在須臾。精神尚好、或時微利、兩脇虛脹、口燥鼻乾、常多粘唾、有時唇赤、有時欲睡、漸就沉羸、猶如涸魚不覺死也。〔又曰、傳屍之候、本起無端、

78「蘇遊」（蘇游）については、『旧唐書』志第二十七 経籍下に、「太一鐵胤神丹方三卷 蘇遊撰」「玄感傳屍方一卷 蘇遊撰」の二書の選者としてその名がある。『新唐書』では「蘇遊」は「蘇游」と記される。また『正統道藏』洞神部厭術類、唐・梅彪撰『石葉爾雅』に「蘇遊経」が、北宋・『雲笈七籤』『三品頤神保命神丹方叙』に「大唐開耀二年、歲次壬午正月乙未朔十五日己酉、蘇遊撰」とみえる。

79「蘇遊論」は、唐・王燾『外台秘要方』『傳屍方四首』に見え、また同書「虚勞骨蒸方」に「蘇遊文感論」がみえる。

莫問老少男女、皆有此疾。大抵五行相剋⁸⁰、而生穴內、傳毒氣周遍五臟、漸熟羸瘦、以至于死、死訖又傳家親一人、故曰傳屍、亦名傳症。〕〔以其初傳、半臥半起、號曰殮殍。⁸¹〕〔氣息嗽者、名曰肺痿。⁸²〕〔骨體身中熱、稱爲骨蒸。⁸³〕〔內傳五臟、名曰復連、不解療者、乃至滅門。⁸⁴〕〔假如男女虛損得之、名曰勞極。〕〔吳楚乃名淋瀝。〕〔巴蜀亦名勞極。〕⁸⁵

【訓読】

論じて曰く、大抵伝屍の候、心に在り。胸脇満悶し、背膊煩痛し、両目明からず、四肢力無く、寝臥せんと欲すると雖も、睡ても常に寝ねず、脊脊急痛し、腰膝酸疼し、多く臥し少しく起き、状は病を伴るが如く、毎に早旦に至れば、精神尚お存し、無病の如く有れども、日午の後は、四体微熱し、面は顔色無く、人の過ち見るを喜み、常に忿怒を懷き、纒か意に称わざれば、即ち多く嘔吐し、行立するに脚弱り、夜臥するに盗汗し、夢に鬼と交わり、或いは先亡を見、或いは多く驚怖し、時に氣息する有り、時に咳嗽する有り、飲食を思うと雖も、多く餐すること能わざりて、死須臾に在り。精神尚お好ければ、或いは時に微かに利し、両脅は虚脹し、口燥き鼻乾き、常に粘唾多く、時に唇赤きこと有り、時に睡らんと欲すること有り、漸いに沈羸に就くこと、猶お涸魚⁸⁶の死を覺らざる如きなり。〔又曰く、伝屍の候、本と端無きより起り、老少男女を問う莫く、皆此の疾有り。大抵五行相剋して、穴内に生じ、毒氣を伝え五臟に周遍くし、漸く熟し羸瘦し、以て死に至る。死訖われば、又家親の一人に伝う、故に伝屍と曰い、亦伝症と名づく。〕〔其の初めて伝わりしとき、半臥半起するを以てし、号して殮殍⁸⁷と曰う。〕

80 『外台秘要方』では「大都此病相剋」。

81 『外台秘要方』卷十三、虚勞骨蒸方では「其初得半臥半起、號爲殮殍」。

82 『外台秘要方』虚勞骨蒸方では「氣急嗽者、名曰肺痿」。

83 『外台秘要方』虚勞骨蒸方では「骨體中熱、稱爲骨蒸」。

84 『外台秘要方』虚勞骨蒸方では「内傳五臟、名之伏連、不解療者、乃至滅門」。「復連」は、「伏連」と記載。

85 『外台秘要方』虚勞骨蒸方では「假如男子因虚損得之、名爲勞極。吳楚云淋瀝、巴蜀云極勞」とあり、『急救仙方』では「男女」とあるが「男子」となり異なる。

86 「涸魚」は、「涸轍鮒魚」のこと。「莊子」外物、「周顧視車轍中、有鮒魚焉。……鮒魚忿然作色曰、吾失我常與、我無所處。吾得斗升之水然活耳」。

87 「殮殍」は、漢・揚雄撰、晋・郭璞注『輶軒使者絶代語釈別国方言』に「殮殍、微也……凡病而不甚曰殮殍」とあり、そこに「病半臥半起也」と注がある。

〔氣息嗽する者は、名づけて肺痿⁸⁸と曰う。〕〔骨体身中熱すれば、称して骨蒸⁸⁹と為す。〕〔内りて五臓に伝われば、名づけて復連⁹⁰と曰い、解して療せざる者は、乃ち減門するに至る。〕〔仮如男女虚損して之を得れば、名づけて勞極と曰う。〕〔呉楚乃ち淋瀝と名づく。〕〔巴蜀亦た勞極と名づく。〕

【口語訳】

以下のように論じる。たいてい伝屍の症候は、心(の臓)にある。胸脇がふさがりうっとうしく、背や上腕は煩痛し、両目ははっきり見えず、四肢は力無く、寝ようと思って横になってもいつも眠れない、背骨は強ばり痛み、腰や膝は鈍く疼き、ほとんど横になっていてたまに起きる。仮病のように見える状態で、いつも早朝になれば、精神はまだしっかりとて、病ではないようであるが、午後は、身体に微熱がでて、顔は血の気が引き、人のわざわいを見るのを喜び、いつも怒っていて、少しでも意に沿わないことがあれば、大いに怒る。歩行は脚が弱り、夜ねれば寢汗し、夢で鬼と交わったり、先祖の亡霊を見たり、或いはひどく驚怖し、ハアハアと息をしたり、咳き込んだりして、飲食をしたいと思うが、しっかりと食事を取ることが出来ず、死が間近にせまっている。精神がまだはっきりしていれば、微かに下痢したり、両脇が虚脹れたり、口が燥き鼻が乾き、いつも粘っこい唾が多く、唇が赤かったり、時に睡りたいと思い、だんだんと痩せ衰えてしまうことは、轍の中のわずかな水たまりの中の魚が死をさとらないようなものである。〔また次のように言われる。伝屍の症候は、発端はなく、老若男女を問わず、皆なこの疾にかかる。大抵五行相剋して、穴内に生じて、毒気があまねく五臓に伝わり、しだいに進行して羸瘦し、死に至り、死んでしまえば、又家族の一人に伝わる、なので伝屍といい、また伝症とよばれる。〕〔伝染した初期は、寝たり起きたりなので、殭蹠(寝たり起きたり病)とよぶ。〕〔氣息が嗽するときは、肺痿とよぶ。〕〔骨髓から身体の中

88 「痿」は、二日に一度の癰。『説文解字』に「二日一發癰」。「肺痿」は、肺葉が枯れしぼんで起こす病状。唐・孫思邈撰、宋・林億等校正『備急千金要方』卷五十六、肺臟方、肺痿第六に「論曰、寸口脈數、其人病欬、口中反有濁唾涎沫出、何也。師曰、此為肺痿之病。何從得之。師曰、病熱在上焦、因欬為肺痿。或從汗出、或從嘔吐、或從瘧渴、小便利數、或從便難、數被駛藥下、重亡津液、故得肺痿」とある。

89 「骨蒸」は、蒸病の一つ。隋・巢元方『諸病源候論』卷四、虚勞骨蒸候に「夫蒸病有五、一曰骨蒸、其根在腎。且起體涼、日晚即熱、煩躁、寢不能安、食無味、小便赤黃、忽忽煩亂、細喘無力、腰疼、兩足逆冷、手心常熱。蒸盛過傷内則變為疔、食入五臓」とある。

90 「復連」、傳尸病の一つ。唐・王燾『外台秘要方』では「伏連」と記載され、同書、伏連方五首に「(張)文仲療伏連病、本緣極熱氣相易、相連不斷、遂名伏連、亦名骨蒸傳屍、比用此方甚驗」とある。

が熱すれば、骨蒸という。〕〔体内に入って五臓に伝われば、復連（伏連）といい、ゆるめて治さなければ、ひいては一族が絶滅するまでになる。〕〔もし男女とも虚損してこれになれば、勞極と呼ぶ。〕〔呉楚では淋瀝とよぶ。〕〔巴蜀ではまた勞極とよぶ。〕

其源先從腎起、初受之氣、兩脛酸疼、腰背拘急、行立脚弱、飲食減少⁹¹、兩耳颼颼、眞似風聲、夜臥遺泄、陰汗痿弱。腎既受訖、次傳於心。心初受氣、夜臥心驚、或多恐悸、心懸之氣、吸吸欲盡、夢見傳於先亡、有時盜汗、飲食無味、口内生瘡、心氣煩熱、惟欲眠臥、朝輕夕重、兩頰口唇、悉皆紋赤、如傳臙脂、又時手足五心煩熱。心受已、次傳於肺。肺初受氣、咳嗽、氣力微痛、有時喘氣、卧即便甚、鼻口乾燥、不聞香臭、如或忽聞、惟覺枯腐物氣、有時惡心、憤憤欲吐、肌膚枯燥、時或疼痛、或似蟲行、乾皮細起、狀若麩片。肺既受已、次傳於肝。肝初受氣、兩目膜膜⁹²、面無血色、尚欲顰眉、眼視不遠、目常乾澁、又時赤痛、或復睛黃、朝昏憊暮、常欲合眼、及時睡卧、常睡不著。肝既受已、次傳於脾。脾初受氣、兩肋虛脹、食不消化、又時瀉利、水穀生蟲、有時肚痛、腹脹雷鳴、唇口焦乾、或生瘡腫、毛髮乾聳、無有光潤、或時上氣、撐肩喘息、痢赤黑汁、見此證者、乃不治也。

【訓読】

其の源先ず腎^と從り起こり、初めて之が氣を受くるに、兩脛酸疼し、腰背拘急し、行立するに脚弱り、飲食減少し、兩耳颼^{しゅうしゅう}と、眞に風声の似く、夜臥さば遺泄^{ごせ}し、陰汗し痿弱す。腎 既に受け訖^おわらば、次いで心に伝う。心初めて氣を受くれば、夜臥さば心驚き、或いは恐悸を多くし、心懸^この氣ありて、吸吸として尽きんと欲し、夢に見て先亡に伝え、有いは時に盜汗し、飲食味無く、口内瘡を生じ、心氣煩熱し、惟だ眠り臥さんと欲し、朝に軽く夕に重く、兩頰口唇、悉皆く紋赤く、臙脂^{ようじ}を傳くが如く、又た時に

91 原文では「飲食減少」。明・朱橚『普濟方』卷二百三十七「傳屍羸瘦」、あるいは明・王肯堂『証治準繩』卷二「傳尸勞」には、「飲食減少」。今、これにより改める。

92 「兩目膜膜」、原文は「兩目眈眈」。『外台秘要方』卷十三、虛勞骨蒸方七首には「肝初受氣、兩目膜膜、面無血色、……」となっている。『普濟方』卷八十一、眼目門、延年令明目方には「以申傳藥者、為其日至日下便膜膜然暗如有物也。」とあり眼科の症状として「膜膜」がある。いまこれにより改めた。「眈」は、司馬遷『史記』、扁鵲倉公列伝に『史記正義』が「膀胱重九兩二銖、縱廣九寸、盛溺九升九合」と注をつけさらに「膀胱、廣也。」と注がある。しかし今はこれを取らない。

93 「遺泄」、遺精、失精に同じ。夢をみて遺精するものを夢精といい、日中にもらすものを滑精という。明・王肯堂『証治準繩』卷三十一、類方大小腑門に「固本鎖精丸。治元陽虛憊、精氣不固、夢寐遺精、夜多盜汗、……」。

94 「心懸」は、隋・巢元方『諸病源候論』卷十六、心懸急懊痛候に、「心如懸而急煩懊痛也」とある。

手足五心煩熱⁹⁵す。心受け^{おわ}已らば、次いで肺に伝わる。肺初めて気を受くるに、咳嗽し、氣力微痛し、時に喘氣有りて、臥さば即便ち甚しく、鼻口乾燥し、香臭を聞かざるも、如し或いは忽ち聞くに、惟だ枯腐物の氣を覚ゆれば、時に惡心有り、^{かいかい}憤憤として吐かんと欲し、肌膚枯燥し、時に或いは疼痛し、或いは虫行くが似く、乾皮細起し、状は麩片の若し。肺既に受くること已まば、次いで肝に伝わる。肝初めて気を受くるに、両目膜膜として、面血色無く、尚お眉を擧めんと欲し、眼視ること遠からず、目常に乾き澀り、又た時に赤く痛み、或いは復た睛黄ばみ、^{くれ}朝昏槽慕し、常に眼を合んと欲し、時に及びて睡臥するも、常に睡に著かず。肝既に受くること已まば、次いで脾に伝わる。脾初めて気を受くるに、両肋虚脹し、食消化せず、又た時に瀉利し、水穀虫を生じ、時に肚痛有り、腹脹り雷鳴し、唇口焦乾し、或いは瘡腫を生じ、毛髮乾き聳ち、^{あら}光潤有る無く、或いは時に上氣し、撐肩して喘息し、痢赤黒汁なり、此の証を見わす者、乃ち不治なり。

【口語訳】

そのはじめりは先ず腎（の臓）より起こる。初めてこの気を受け始めると、両脛はだるく疼き、腰背はひきつり、立ったり歩いたりするのに脚が弱り、飲食は減少し、両耳には颼颼と、まさに風が吹いているように聞こえ、夜間寝ると遺精し、冷や汗をかきひ弱になる。腎がおわれれば、次は心（の臓）に伝わる。心が初めてこの気を受ければ、夜ねると心が驚き、あるいはひどく恐怖（おびえどきどき）し、（ひっかかったような）心懸の気があり、^{きゅうきゆう}吸吸と（息が）止まりそうになり、祖先と通じる夢を見、ある時には寝汗をかき、飲食しても味がわからず、口の中に瘡（かいよう）ができ、心気が煩熱し、ただ眠って横になりたいと思ひ、（それは）朝には軽いが夕方には重く、両頬口唇が、すべて色は赤く胭脂（紅を）つけたようで、また時には手足が五心煩熱する。心がおわれれば、次に肺（の臓）に伝わる。肺が初めて（この）気を受ければ、咳嗽し、氣力が微かに痛み、時には喘氣が有り、横になればひどく、鼻口が乾燥し、香りや臭いがわからなくなるが、もし突然臭いがわかれば、ただ枯れたり腐ったりした物の臭いを感じ、時には惡心し、むかついて吐きそうになり、肌膚が枯燥し、時には疼痛し、あるいは虫が這うように感じ、乾いた皮が細かく隆起して、そのさまは麩片のようである。肺がおわれれば、次に肝（の臓）に伝わる。肝が初めて気を受ければ、両目が膜が張ったようにかすみ、顔は血色が無く、眉を擧めようとし、眼は遠くないところを視て、目は常に乾い

95 「五心煩熱」、五心は、両手掌、両足蹠と胸中のこと。たとえば『道樞』金液龍虎篇の「夫五心有一痛者斯大限至也」に「五心者兩手兩足心與其心也」と注がある。

てしょぼしょぼとし、時には赤くなり痛み、あるいはまた^{ひとみ}睛が黄ばみ、朝晩に唐突にはんやりし、常に眼をとじようとし、ねむろうと横になっても、常にねむることができない。肝（の臓）が終われば、次に脾に伝わる。脾が初めて気を受けると、^{かき}両脇が虚脹して、食が消化せず、時には下痢し、（摂取した）飲食物が虫を生じ、時に腹痛がおき、腹が張ってゴロゴロと鳴り、口唇がカサカサになり、あるいはできものが生じ、毛髪はバサバサになり、ツヤがなく、ときには上気し、肩を支えにつっぱって喘息し、下痢は赤黒い汁となる。この証があらわれる者は、治らない。

夫骨蒸、殯滯、復連、屍疰、癆疰、蟲疰、毒疰、熱疰、冷疰、食疰、鬼疰等、皆曰傳屍者。以疰者注也。病自上注也。與前人⁹⁶相似、故曰疰。其變有二十二種、或三十六種、或九十九種、大略令人寒熱盜汗、夢與鬼交、遺精白濁、髮乾而聾、或腹內有塊、或腦後兩邊有小結、復連數箇、或聚或散、沈沈默默、咳嗽痰涎、或咯⁹⁷膿血、如肺痿肺癰狀、或復下痢、羸瘦困乏、不自勝持、積月累年、以至於死、死復傳疰、易傳親人、乃至滅門者是也。更有蜚蟲、遁屍、寒屍、喪屍、屍疰等。謂之五屍。及大小附疰等證不一。知其所苦、無處不惡、乃挾諸鬼邪而害人⁹⁸。其證多端、傳變推遷、難以推測、故自古及今、愈此病者十不一得⁹⁹。所謂狸骨、獺肝、天靈蓋、銅鎖鼻、徒有其說、未嘗取効、惟膏肓俞、崔氏穴法、若聞早灸之、可否幾半、晚亦不濟也。¹⁰⁰

96 原文では、「人」。『三因極一病証方論』、『婦人大全良方』、『世医得效方』、『普濟方』、『薛氏医案』では「前人」となっている。今これを補う。

97 「咯」、原文は「略」。『三因極一病証方論』では「咯膿血」、いま文意により改めた。

98 原文では、「及大小附疰等證不一。知其所苦、無處不惡、乃挾諸鬼邪而害人」。『三因極一病方』では「及大小附著等証不一。知其所苦、無處不惡、乃挾諸鬼邪而害人」とあり「不的」が「不一」となり「大小附著等証不一」となっている。意により今これを改めた。

99 「愈此病者十不一得」は『三因極一病方』では「愈此病者十不得一」。

100 「夫骨蒸」以下のこの部分は宋・陳言『三因極一病証方論』卷十、勞瘵叙論にある以下の記述にはほぼ一致する。「夫骨蒸、殯滯・復連・尸疰・癆疰・蟲疰・毒疰・熱疰・冷疰・食疰・鬼疰等、皆曰傳尸者。以疰者、注也、病自上注下、與前人相似、故曰疰。其變有二十二種、或三十六種、或九十九種。大略令人寒熱盜汗、夢與鬼交、遺泄白濁、髮乾而聾。或腹中有塊、或腦後兩邊有小結核、連復數箇、或聚或散、沉沉默默、咳痰涎、或咯膿血、如肺痿肺狀、或復下痢羸瘦、困乏不自勝持、積月累年、以致於死。死後乃疰易傍人、以至滅門者有之。更有飛尸、遁尸、塞尸、喪尸、尸疰等、謂之五疰、及大小附著等証不一。知其所苦、無處不惡、乃挾諸鬼邪而害人。以三因推之、內非七情所忤、外非四氣所襲、雖若麗乎不內外因、奈其証多端、傳變遷移、難以推測。故自古及今、愈此病者十不得一。所謂狸骨、獺肝、天靈蓋、銅鏡鼻、徒有其說、未嘗見効。惟膏肓俞、崔氏穴、若早知、灸之可愈、若稍晚、亦不濟也。近集得經驗方、服之頗效、漫錄於左、餘缺以俟明哲」（『急救仙方』）と異なる部分に下線を付した）。

【訓読】

夫れ骨蒸、殭瘵、復連、屍疰¹⁰¹、癆疰¹⁰²、虫疰¹⁰³、毒疰¹⁰⁴、熱疰¹⁰⁵、冷疰¹⁰⁶、食疰¹⁰⁷、鬼疰等、皆伝屍と曰う者なり。以えらく疰は注なり、病の上より注すればなり。前人と相似たり。故より疰と曰うは、其の変二十二種、或いは三十六種、或いは九十九種有り。大略人をして寒熱盜汗し、鬼と交わるを夢み、遺精白濁し、髪乾きて聳だち、或いは腹内に塊有り、或いは腦の後ろ両辺に小結有り、復た連らなること数個あり、或いは聚まり或いは散じ、沈沈黙黙して、咳嗽痰涎し、或いは膿血を咯くこと、肺痿肺癰の状の如く、或いは復た下痢し、羸瘦困乏し、自ら持するに勝えず、積月累年して、以て死に至り、死すれば復た疰を伝え、親人に伝わり易く、乃ち滅門に至る者は是なり。更に蜚

- 101 「屍疰」は、「尸注」の記述が隋・巢元方『諸病源候論』卷二十三、尸病諸候、尸注候に、「尸注病者、則是五尸内之尸注、而挾外鬼邪之氣、流注身體、令人寒熱淋瀝、沉沉黙黙、不的知所苦、而無處不惡。或腹痛脹滿、喘急不得氣息、上衝心胸、傍攻兩脇、或礫塊踊起、或攣引腰脊、或舉身沉重、精神錯雜、恒覺悞謬。每節氣改變、輒致大惡、積月累年、漸就頓滯、以至於死。死後復易傍人、乃至滅門。以其尸病、注易傍人、故為「尸注」とある。晋・葛洪『肘後備急方』卷一、治卒中五尸方第六に「五尸者、飛尸、遁尸、風尸、沉尸、尸注也。今所載方兼治之。其狀腹痛脹急、不得氣息、上衝心胸、旁攻兩脇、或礫塊涌起、或攣引腰脊……」、「尸注者、舉身沈重、精神錯雜、常覺悞變、每節氣改變、輒致大惡」、「凡五尸、即身中屍鬼接引也、共為病害。經術甚有消滅之方、而非世徒能用」などとある。
- 102 「癆疰」は、「勞注」が、隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候、勞注候に「注者、住也、言其病連滯停住、死又注易傍人也。人大勞虛而血氣空竭、為風邪所乘、致不平復、小運動便四肢體節沉重、虛喘噎乏汗出、連滯不瘳、小勞則極、故謂之勞注」とある。
- 103 「蟲(虫)疰」は、「蠱注」が隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候、蠱注候に「注者、住也。言其病連滯停住、死又注易傍人也。蠱是聚蛇蟲之類、以器皿盛之、令其自相噉食、餘有一箇存者為蠱也、而能變化。人有造作歌事之者、以毒害於他、多於飲食内而行用之。人中者、心悶腹痛、其食五藏盡則死。有緩有急、急者倉卒十數日之間便死、緩者延引歲月、遊走腹内、常氣力羸瘦、骨節沉重、發則心腹煩懊而痛、令人所食之物、亦變化為蠱、漸侵食五藏盡而死。則病流注染著傍人、故謂之蠱注」とある。
- 104 「毒疰」は、隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候、毒注候に「注者、住也、言其病連滯停住、死又注易傍人也。毒者、是鬼毒之氣、因飲食入人腹内、或上至喉間、狀如有物、吞吐不出、或遊走身體、痛如錐刀所刺、連滯停久、故謂之毒注」とある。
- 105 「熱疰」の詳細はわからない。これに関連すると思われる「温注」は隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候、温注候に「注者、住也、言其病連滯停住、死又注易傍人也。人有染温熱之病、瘳後餘毒不除、停滯皮膚之間、流入藏府之内、令人血氣虛弱、不甚飲食、或起或臥、沉滯不瘳、時時發熱、名為温注」とある。
- 106 「冷疰」は、「冷注」が隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候、冷注候に「注者、住也。言其病連滯停住、死又注易傍人也。陰陽偏虛、為冷邪所傷、留連府藏、停滯經絡、内外貫注、得冷則發、腹内時時痛、骨節痛疼、故謂之冷注。其湯熨針石、別有正方、補養宣導、今附於後。養生方導引法云、一手長舒合掌、二手捉頰、挽之向外、一時極勢二七、左右亦然。手不動、兩向側勢急挽之二七。去頸骨急強・頭風・腦旋・喉痺・髀内冷注、偏風」とある。
- 107 「食疰」は、「食注」が隋・巢元方『諸病源候論』卷二十四、注病諸候、食注候に「注者、住也、言其病連滯停住、死又注易傍人也。人有因吉凶坐席飲噉、而有外邪惡毒之氣、隨食飲入五藏、沉滯在内、流注於外、使人肢體沉重、心腹絞痛、乍瘳乍發、以其因食得之、故謂之食注」とある。

虫¹⁰⁸、遁屍¹⁰⁹、寒屍¹¹⁰、喪屍¹¹¹、屍疰等有り。之を五屍¹¹²と謂う。大小附著等の証一ならざるに及びては、其の苦しむ所、処として悪からざる無く、乃ち諸鬼邪を挟みて人を害うを知る¹¹³。其の証多端なりて、伝変推遷し、以て推測し難く、故に古自り今に及ぶまで、此の病を愈す者十に一を得ず¹¹⁴。所謂狸骨¹¹⁵、獺肝¹¹⁶、天靈蓋¹¹⁷、銅鎖鼻（銅鏡鼻）¹¹⁸、徒らに其の説有るも、未だ嘗て効を取らず、惟だ膏育俞、崔氏穴の法¹¹⁹、若し聞くこと早ければ之に灸すれば、可否幾んど半ばす。晚ければ亦た済わざるなり。

- 108 「蜚虫（蟲）」、「蜚」は飛ぶの意。加納喜光『動物の漢字語源辞典 新装版』、p.84では「羽を並べて飛ぶ虫を暗示させ、古くはイナゴを意味した」とする。『三因極一病証方論』では、この「蜚蟲」（飛蟲）が、「飛尸」になっている。「飛尸」は『諸病源候論』卷二十三、尸病諸候、飛尸候に、「飛尸者、發無由漸、忽然而至、若飛走之急疾、故謂之飛尸。其狀心腹刺痛、氣息喘急脹滿、上衝心胸者是也」とある。
- 109 「遁屍（遁尸）」は、『諸病源候論』卷二十三、尸病諸候、遁尸候に、「遁尸者、言其停遁在人肌肉血脉之間、若卒有犯觸即發動、亦令人心腹脹滿刺痛、氣息喘急、傍攻兩脇、上衝心胸、瘥後復發、停遁不消、故謂之遁尸也」とある。
- 110 「寒屍（寒尸）」は『諸病源候論』卷二十三、尸病諸候、寒尸候に、「寒尸者、由身内尸蟲與外邪相引接所成、發動亦令人心腹脹滿刺痛。但以其至冬月感於寒氣則發、故謂之寒尸」とある。
- 111 「喪屍（喪尸）」は、『諸病源候論』卷二十三、尸病諸候、喪尸候に、「人有年命衰弱、至於喪死之處、而心意忽有所畏惡、其身内尸蟲、性既忌惡、便更接引外邪、共為疹病。其發亦心腹刺痛、脹滿氣急。但逢喪處、其病則發、故謂之喪尸」とある。
- 112 「屍（尸）」は『諸病源候論』卷二十三、尸病諸候、諸尸候に「人身内自有三尸諸蟲、與人俱生、而此蟲忌血惡、能與鬼靈相通、常接引外邪、為人患害。其發作之狀、或沈沈默默、不的知所苦、而無處不惡、或腹痛脹急、或塚塊踊起、或擊引腰脊、或精神雜錯、變狀多端。其病大體略同、而有小異、但以一方治之者、故名諸尸也」とある。
- 113 「大小附著等の証一ならざるに及びては、其の苦しむ所、処として悪からざる無く、乃ち諸鬼邪を挟みて人を害うを知る」は文意より『三因極一病方』の「及大小附著等証不一。知其所苦、無處不惡、乃挾諸鬼邪而害人」に従った。
- 114 「此の病を愈す者十に一を得ず」文意により『三因極一病方』の「愈此病者十不得一」に従った。
- 115 「狸骨」は、狸はヤマネコ・オオヤマネコ・野生のネコ或いはタヌキ。骨を焼灰にして用いる。宋・唐慎微『証類本草』卷十七、獸部中品に「狸骨。味甘、温、無毒。主風疰、尸疰、鬼疰、毒氣」とある。
- 116 「獺肝」。獺は、水獺、イタチ科シナカワウソ、カワウソ。肝を焼灰にして用いる。『証類本草』卷十八、獸部下品に、「獺肝。味甘、有毒。主鬼疰蠱毒、却魚鯁、止久嗽、燒服之」とある。
- 117 「天靈蓋」（天靈蓋・髑髏）は、人類の頭蓋骨。『証類本草』卷十五、人部に「天靈蓋。味鹹、平、無毒。主傳尸尸疰、鬼氣伏連、久瘡癩癧、寒熱無時者。此死人頂骨十字解者、燒令黑、細研、白飲和服、亦合諸藥為散用之。方家婉其名爾」また明・李時珍『本草綱目』卷五十二、人之一には、「天靈蓋」、「釋名、腦蓋骨、仙人蓋、頭顱骨」とある。
- 118 「銅鎖鼻」は、『三因極一病証方論』では「銅鏡鼻」。唐・孫思邈『備急千金要方』卷五、婦人方には「銅鏡鼻湯」・「小銅鏡鼻湯」の処方があり、さらに「小銅鏡鼻湯」には「治遁尸心腹及三十六尸疾」とある。また『証類本草』卷五、玉石部下品には「錫銅鏡鼻。主女子血閉、癥瘕、伏陽、絶孕及伏尸邪氣」とある。『急救仙方』の「銅鎖鼻」は「銅鏡鼻」（銅鏡の鈕）の誤りであろう。
- 119 宋・陳自明『婦人大全良方』卷五、「勞瘵叙論第一」には、「唯膏育俞、崔氏穴名四花、有六穴」とある。

【口語訳】

骨蒸、殭蹠、復連、屍疰、癆疰、虫疰、毒疰、熱疰、冷疰、食疰、鬼疰など、皆伝屍という。思うに疰は注の意味であろう。病が上の世代より注ぐ(伝わる)からである。先祖(が持っていた病)と似ている¹²⁰、そこで疰というのである。その変種は二十二種、あるいは三十六種、あるいは九十九種ある。たいてい(この病により)人は寒熱盜汗し、鬼と交わることを夢み、遺精白濁し、髪は乾燥しバサバサになり、あるいは腹中に塊ができて、あるいは脳の後ろ両辺に小結ができて、またそれらが数個つながることもある、(これらは)聚まったり散ったりする、(その人は)深く黙り込み、咳嗽し痰涎がでて、時には膿血を吐き、肺痿や肺癰のようである、時にはまた下痢し、痩せ衰え困憊し、自ら保持することが出来ず、年月を経て、死に至る。(その人が)死ねばまた疰が伝わる親族に伝わりやすく、滅門に至るとするのはこのことである。さらに蜚虫(あるいは飛尸か)、遁屍、寒屍、喪屍、屍疰などがある。これを五屍という。大小これに付随しておこる症状は同一でなく、その苦しむ所は悪くないところはない。そこで色々な鬼邪にとりつかれ人が害されていることがわかる。その苦しむ所は悪くないところはない(すべて悪く)、色々な鬼邪を抱え込んで人をそこなうことがわかる。その証は多様で、伝わって変異し、推測することが難しい。なので昔から今に至るまで、この病を治すことは、十のうちの一もできない。いわゆる狸骨、獺肝、天靈蓋、銅鎖鼻(銅鏡鼻のこと)と、むやみに説があるが、いまだかつて効果を得られない。ただ膏肓俞と崔氏穴の方法を、もし早め knowing 灸をすれば、およそ半分程度は治る。遅ければ手遅れとなり救えない。

癆療諸證¹²¹

【訓読】

癆療諸証

120 今、ここでは「病が上の世代より注ぐ(伝わる)」と解した。『春秋左氏伝』昭公十年に「晉侯夢大厲、被髮及地、搏膺而踊曰、殺余孫不義。『注』、厲、鬼也、趙氏之先祖也。……余得請於帝矣。壞大門及寢門而入。公懼、入于室、又壞戶。」とあり、前人を先祖の鬼と解すれば天(上)から下ったと読むことも出来るだろう。

121 この「癆療諸証」の項の各文と同様の文が、陳言『三因極一病証方論』淳熙元年(1174年)の癆療諸証・陳自明『婦人大全良方』嘉熙元年(1237年)の二十四種蒸病論・朱橚『普濟方』洪武二十三年(1390年)の「癆療門」、「總論」と「婦人諸疾門」に見られる。

【口語訳】

癆瘵の諸症状

〔病者増寒壯熱、自汗面白、目乾口苦、精神不守、恐畏不能獨臥、其傳在肝。〕

〔病者寒熱、面黒鼻燥、忽忽喜忘、大便苦難、或復清瀉¹²²、口瘡、其傳在心。〕

〔病者増寒發熱、面青唇黄、舌舉強不能嚙¹²³、飲食無味、四肢羸瘦、口吐涎沫、其傳在脾。〕

〔病者増寒發熱、面赤鼻乾、口燥毛折、咯嗽喘急、時吐白涎、或有血線、其傳在肺。〕

〔病者増寒増熱、面黄、耳輪焦枯、髻骨損痛、小便血濁遺瀝、其傳在腎。〕

〔所謂癆蒸者、二十四種、隨證皆可考。若眉毛折、髮焦、肌膚甲錯、其蒸在脾。〕

〔外人覺熱、自返思寒、身振𦵏劇¹²⁴、其蒸在肉。〕

〔髮焦鼻衄、或復尿血、其蒸在血。〕

〔方熱煩燥、痛如刺針、其蒸在脉。¹²⁵爪甲焦枯、目昏、兩脇急痛、其蒸在筋。板齒黒燥、大杼酸痛、其蒸在骨¹²⁶。背脊疼痛、胛骨酸痛、其蒸在腦¹²⁷。〕

〔男子失精、女人自淫、其蒸在玉房。乍寒乍熱、中脘與臏¹²⁸中煩悶、其蒸在三焦。小

122 「或復清瀉」は『三因極一病証方論』などでは「或復泄瀉」となっている。ここでは「清瀉」は「泄瀉」の意であろう。

123 『三因極一病証方論』・『婦人大全良方』では「病者、増寒發熱、面青唇黄、舌本強不能嚙、飲食無味、四肢羸瘦、吐涎沫、其傳在脾。」いまこれにより「嚙」の字を補った。

124 「身振𦵏劇」は原文では「身振𦵏劇」。「𦵏劇」については『三因極一病証方論』「癆瘵諸証」および『婦人大全良方』「二十四種蒸病論」では「身振𦵏劇」とある。さらに『備急千金要方』痰飲第六などにも「膈上之病、滿喘欬吐、發則寒熱、背痛惡寒、目泣自出、其人振振身𦵏劇、必有伏飲。」と良く似た症状が記載されている。これにより「𦵏劇」に改めた。また「身振」については、『婦人大全良方』・『三因極一病証方論』は「外人覺熱、自反惡寒、身振𦵏劇、其蒸在肉」とあるが、『普濟方』では「外人覺熱、自反惡寒、身熱𦵏劇、其蒸在肉。」とある。ここでは「身振𦵏劇」が良いと思われる。

125 「方熱煩燥、痛如刺針、其蒸在脉」。この部分は『婦人大全良方』・『三因極一病証方論』では「身熱煩燥、痛如針刺、其蒸在脉」。『普濟方』では「身熱煩燥、痛如刺針、其蒸在脉」。「煩燥」は「煩燥」に同じ。

126 原文は、「版��齒黒痛燥、大杼醇痛、其蒸在骨」であるが他書と異なるところが多い。『三因極一病証方論』癆瘵叙論では、「板牙黒燥、大杼酸痛、其蒸在骨」。『婦人大全良方』、二十四種蒸病論では、「版齒黒燥、大杼酸痛、其蒸在骨」。『普濟方』、癆瘵門、總論、及び同書、婦人諸疾門では、「版齒黒燥、大牙酸疼、其蒸在骨」となっている。本来は「板齒（牙）黒燥、大杼酸痛（疼）、其蒸在骨」であろう。今これにより改める。

127 「背脊疼痛、胛骨酸痛、其蒸在腦」。この部分は『三因極一病証方論』では「背脊疼痛、胛骨酸嘶、其蒸在髓」。『婦人大全良方』・『普濟方』では「背脊疼痛、胛骨酸嘶、其蒸在髓」。「酸嘶」は、酸痛の劇烈な様。

128 「乍寒乍熱、中脘臏腫、中煩悶、其蒸在三焦」。()内に示した本書のこの部分は『三因極一病証方論』・『婦人大全良方』・『普濟方』では、「乍寒乍熱、中脘臏腫中煩悶、其蒸在三焦」。今これ

便黄赤、凝濁如膏、其蒸在膀胱。〕

〔傳道不均、或泄或秘、腹中雷鳴、其蒸在小腸。〕

〔大腹隱隱、右鼻乾疼、其蒸在大腸¹²⁹。口鼻乾燥、腹脹、睡臥不安、自汗流出、其蒸在胃。〕

〔口苦耳聾、脇下疼痛、其蒸在膽、裏急後重、肛門秘塞、其蒸在回腸。〕

〔小腹疔¹³⁰痛、筋脉緩縱、陰器自強、其蒸在宗筋。〕

〔眼昏淚下、時復眩暈¹³¹、燥怒不常、其蒸在肝。〕¹³²

〔耳輪焦枯、腰脚酸疼、起居不得、其蒸在腎。〕

〔情思不寧、無故精泄¹³³、綿綿而下、其蒸在右腎¹³⁴。〕

〔心主胞絡、心膈噎塞、攻擊疼痛、俛仰煩悶¹³⁵、其蒸在膈。〕

〔諸證雖日不同、其根多有蟲嚙、其心肺治之、不可不絕其根也。〕

【訓読】

〔病む者 増寒壯熱し、自汗¹³⁶ めんし面白く、目乾き口苦く、精神守らず、恐畏し^{ひと}独り臥すること能わず、其れ伝わりて肝に在り。〕

により改める。

129 「大腹隱隱、右鼻乾疼、其蒸在大腸」は、『三因極一病証方論』では「大腹隱痛、舌鼻乾疼、其蒸在大腸」、『婦人大全良方』では「大腹隱痛、右鼻乾疼、其蒸在大腸」、『普濟方』、勞瘵門、総論では「大腹隱痛、右鼻乾疼、其蒸在大腸」『普濟方』、婦人諸疾門では「大腹隱痛、口鼻乾疼、其蒸在大腹」下線部に相違がある。『普濟方』頭門、治頭偏痛不可忍方には「内左鼻中、取下清涕」とあり「左鼻」と言う記載もある。

130 本書の「小腹疔痛、筋脉緩縱、陰器自強、其蒸在宗筋」は、『三因極一病証方論』・『婦人大全良方』・『普濟方』、勞瘵門、総論では「小腹疔痛、筋脉緩縱、陰氣自重強、其蒸在宗筋」、『普濟方』、婦人諸疾門、では「小腹疼痛、筋脉緩縱、陰器自強、其蒸在宗筋」となっている。「疔」は「字彙」に、「瘡中冷」、『集韻』に「脛、説文」創肉反出、一曰瘡脛、熱氣箸膚中。或作、𤑔、𤑔、痛、疔、膿」とあり、きずいたみ。瘡の中が冷える。はぜる。創の肉のはぜむくれるを意味する。『三因極一病証方論』などの「疔」は『篇海』に「同疔」とあり、「疔」は『説文』に「腹中急也」とある。ここでは「疔痛」が適当であろう。いま『三因極一病証方論』などに従い改めた。

131 本書の「時復眩暈」は、『三因極一病証方論』などでは、「時復眩暈」となっている。「眩」は『玉篇』に「眩癘也」、『六書故』に「癘積弦急也。亦單作眩」とあり、筋肉のひきつる病の意である。いま『三因極一病証方論』などに従い「眩暈」に改める。

132 「三因極一病証方論」などでは、この後に「舌焦黒、氣短煩悶、酒洒析析、其蒸在心。唇乾口瘡、胸腹脹悶、畏寒不食、其蒸在脾。咳嗽喘滿、吐痰咯血、聲嘶音啞、其蒸在肺」とある。

133 「無故精泄」は、『三因極一病証方論』などでは「無故泄精」。

134 本書では「其蒸在右腎心主胞絡○」となっているが、文意により改めた。

135 「俛仰煩悶」は、『三因極一病証方論』などでは「俛仰煩究」。

136 「自汗」。『三因極一病証方論』、自汗証治に、「夫自汗多因胃風傷暑、及喜怒驚恐、房室虛勞、皆能致之、無間睡醒、浸浸自出、名曰自汗」。

〔病む者 寒熱し、面黒く鼻燥き、^{たちま}忽ち喜び忘れ¹³⁷、大便苦難し、或いは復た清瀉し、口瘡あり、其れ伝わりて心に在り。〕

〔病む者 増寒発熱し、面 青く 唇 黄ばみ、舌 擧がり強ばりて嚙むこと能わず、飲食 味無く、四肢 羸瘦し、口 涎沫を吐く、其れ伝わりて脾に在り。〕

〔病む者 増寒発熱し、面 赤く 鼻 乾き、口 燥き 毛 折れ、咯嗽 喘急し、時に白涎を吐き、或いは血線 有り、其れ^{つたわ}伝りて肺に在り。〕

〔病む者 増寒増熱し、面 黄ばみ、^{じりん}耳輪焦枯し、^{つたわ}筋骨損ない痛み、小便血濁し遺瀝す、其れ伝りて腎に在り。〕

〔所謂の癆蒸¹³⁸なる者、二十四種あり、証に随い皆な考すべし。若し眉毛折れ、髪焦げ、肌膚甲錯¹³⁹すれば、其の蒸、脾に在り。〕

〔外なる人熱を覚ゆるに、自らは返って寒を思い、身振り^{しゅん}瞶劇するは、其の蒸、肉に在り。〕

〔髪焦げ鼻衄し、或いは復た尿血するは、其の蒸、血に在り。〕

〔方に熱し煩燥し、痛み針を刺すが如きは、其の蒸、脈に在り。爪甲焦枯し、目昏み、両脇急痛するは、其の蒸、筋に在り。板齒¹⁴⁰黒燥し、大杼¹⁴¹酸疼するは、其の蒸、骨に在り。背脊疼痛し、^{りょ}脰骨酸痛するは、其の蒸、^{じゆん}腦(髓)に在り。〕

〔男子失精し、女人自淫するは、其の蒸、玉房¹⁴²に在り。^{たちま}乍ち寒し乍ち熱し、中脘¹⁴³と臆中¹⁴⁴と煩悶するは、其の蒸、三焦に在り。小便黄赤、凝濁して膏の如きは、其の蒸、

137 「喜忘」はまた、「忘れ^{やす}喜く」と読むこともできる。しかし『黄帝内経素問』『宣明五氣篇』には「五精所并、精氣并於心則喜」とある。これにより「喜び忘れ」と解した。

138 「癆蒸」(勞蒸)、病名。蒸病と同じ。多くは虚勞に属す。「蒸病」、病名。勞蒸ともいう。潮熱が主証であり、その熱は内から蒸発して出るのに似ているので、この名がある。五蒸、二十三蒸の分類があり、骨蒸がその代表例である。病は勞瘵に属す。」「蒸」、蒸病のこと。身体が蒸熱すること。この証は熱病を患った後、飲酒、肉類を食し、房事過度などによっておこる。虚勞の発熱とは異なるが、火旺して津液が涸渇するのは同じである。日が経っても治癒しなければ瘵病となる(『漢』)。

139 「肌膚甲錯」は、皮膚がさがさとさめはだのようになっていること(『漢』)。『御纂医宗金鑑』訂正仲景全書金匱要畧註、瘡癰腸癰浸淫病脈證并治「腸癰之為病、其身甲錯、腹皮急、按之濡如腫狀」とありここに「癰生於内、則氣血為癰所奪、不能外榮肌膚、故枯皴如甲錯也。」と注がある。

140 「板齒(牙)」は、門歯、前歯。

141 「大杼」は、足の膀胱經に属する經穴。上背部、第一胸椎棘突起下縁と同じ高さ、後正中線の外方一寸五分。八会穴の骨会。

142 「玉房」、『普濟方』服餌門、養生法、赤松子服氣に「以丹書玉房為丹田方一寸」とありここに「玉房在臍下三寸是」と注がある。

143 「中脘」、胃の中部。『難經本紀』三十一難に、「中焦者、在胃中脘、不上不下」。

144 「臆中」、胸腔中央。『黄帝内経素問』『靈蘭秘典論篇』の「臆中者、臣使之官、喜樂出焉」に、王冰の注「臆中者、在胸下兩乳之間、為氣之海」がある。

膀胱に在り。

〔伝道均わず¹⁴⁵、或いは泄し或いは秘し、腹中雷鳴するは、其の蒸、小腸に在り。〕

〔大腹¹⁴⁶隠隠として、右鼻乾き疼くは、其の蒸、大腸に在り。口鼻乾燥し、腹脹り、睡臥すれば安んぜず、自ら汗¹⁴⁷流出するは、其の蒸、胃に在り。〕

〔口苦く耳聾し、脇下疼痛するは、其の蒸、胆に在り、裏急後重¹⁴⁸し、肛門秘塞するは、其の蒸、回腸に在り。〕

〔小腹¹⁴⁹疝痛¹⁵⁰し、筋脈緩縦し、陰器自ら強ばるは、其の蒸、宗筋¹⁵¹に在り。〕

〔眼昏み涙下り、時に復た眩暈し、燥(躁)怒すること常ならざるは、其の蒸、肝に在り。〕

〔耳輪焦枯し、腰脚酸疼し、起居すること得ざるは、其の蒸、腎に在り。〕

〔情思寧からず、故無く精泄れ、綿綿として下るは、其の蒸、右腎に在り〕

〔心主胞絡(包絡)¹⁵²、心膈壅塞し、攻め撃ちて疼痛し、俛仰し煩悶するは、其の蒸、膈に在り。〕

〔諸証同じからずと曰うと雖も、其の根多くは虫嚙むに有り、其の心肺之を治するに、其の根絶たざる可からざるなり。〕

【口語訳】

〔病んでいる人が悪寒し壮んに高熱がで、自ら汗がでて顔面が白く、目が乾き口が苦く、心神が安定せず、恐れて独りで寝ることもできないのは、伝わって肝にある。〕

〔病んでいる人が悪寒して発熱し、顔面が黒く鼻が乾き、すぐに喜んで(我を)忘れ、大便が出にくく、ときには下痢をし、口瘡があるのは、伝わって心にある。〕

〔病んでいる人が悪寒して発熱し、顔面は青く唇は黄色くて、舌があがり強ばって嚙むことができず、飲食の味は無く、四肢が痩せ衰え、口が涎沫を吐くのは、伝わって脾に

145 「伝道均わず」。「伝道」は『黄帝内经素問』『靈蘭秘典論篇』に、「大腸者、傳道之官變化出焉」とあり「大腸」をさす。ここは『太平惠民和劑局方』卷三、治一切氣の、「大便不調、或泄或秘」と同じ意と解した。

146 「大腹」、臍上、中院の部位名(『漢』)。

147 「自汗」という症状については、前掲注136を参照。

148 「裏急後重」、頻繁に便意を催し、排便は希にして肛門部の急迫様疼痛に苦しむ状態(『漢』)。「難經本義」五十七難に「大腹泄者、裏急後重、數至圜而不能便、……」

149 「小腹」、腹部臍下の部分、或は臍下の両旁をいう。一説に小腹は臍下部、少腹は側腹部。(『漢』)

150 「疝痛」、腹中が絞痛すること(『漢』)。

151 「宗筋」、①前陰部、②陰莖(『漢』)。①は『黄帝内经素問』厥論篇に「前陰者、宗筋之所聚」、②は『黄帝内经素問』痿論篇に、「宗筋弛縱、發為筋痿」とある。

152 「心主」、手の厥陰心包絡経。『黄帝内经靈樞経』『邪客』篇に「包絡者、心主之脉也」とあるが、程林纂『聖濟總錄纂要』卷十二、心痛門、心痛統論では「胞絡者、心主之脉也」と書かれており、「胞絡」が「包絡」となっている。これより本書の「胞絡」は「包絡」と解した。

ある。]

[病んでいる人が悪寒して発熱し、顔面が赤く鼻が乾き、口が燥き毛が折れ、嗽を吐き呼吸が喘ぎ、時には白い涎を吐き、あるときは血の線が混じるのは、伝わって肺にある。]

[病んでいる人が悪寒して発熱し、顔面が黄色く、耳介が黄変して痩せ、脛骨が悪くなり痛み、小便は血濁して、ポタポタと漏れるのは、伝わって腎にある。]

[いわゆる癆蒸というものは、二十四種あり、証にしたがってすべて考えなくてはいけない。もし眉毛が折れ、髪がバサバサになり、皮膚が鮫肌になれば、その蒸は、脾にある。]

[他人が発熱しているとわかるのに、自分は逆に寒いと感じ、身震いし瞬きが劇しいのは、その蒸は、肉にある。]

[髪は黄褐色になり鼻血が出て、ときにはさらに血尿が出るのは、その蒸は、血にある。]

[まさに発熱し煩燥し、痛みが針で刺すようなものは、その蒸は、脈にある。爪が枯れ黄ばみ、目が昏み、両脇が急に激しく痛むものは、その蒸は、筋にある。門歯が黒くなり、大桴が鈍く疼くものは、その蒸は、骨にある。背中が疼き痛み、脛骨が鈍く痛むものは、その蒸は、脳（髓）にある。]

[男子が失精し、女人が自淫するものは、その蒸は、（臍下三寸の）玉房にある。たちまち寒気がし、たちまち発熱し、中脘と臍中とが煩悶するものは、その蒸は、三焦にある。小便が黄赤色で、凝濁して膏あぶらのようなものは、その蒸は、膀胱にある。]

[大腸が調わず、ある時は泄しある時は便秘し、腹中がごろごろと雷鳴するのは、その蒸は、小腸にある。]

[大腹（上腹部）がかすかに痛み、右鼻が乾き疼くのは、その蒸は、大腸にある。口鼻が乾燥し、腹が脹り、睡れば不安になり、自汗が涌出するのは、その蒸は、胃にある。]

[口が苦く耳が聾し、脇下が疼痛するものは、その蒸は、胆にある。頻繁に便意を催すが、排便は稀で肛門部が痛み、肛門がふさがり通じないものは、その蒸は、回腸にある。]

[小腹（下腹部）が絞痛し、筋脈がだらりとゆるみ、陰器が自ら硬直するのは、その蒸は、宗筋（前陰部）にある。]

[眼がぼんやりとして涙がでて、時にはさらに眩暈めまいして、さわぎ怒ることが普通でないものは、その蒸は、肝にある。]

[耳介がやせ黄変し、腰と脚がにぶく疼き、日常生活も困難なものは、その蒸は、腎にある。]

[気持ちが安定せず、理由もなく精が泄れて、綿綿と下るのは、その蒸は、右腎にある]

[心主包絡、心膈がつまって塞り、攻め撃ち疼痛して、下を向いたり上を向いたりと煩悶するものは、その蒸は、膈にある。]

[これらの証は同じでないとは言っても、その根本は多くは虫が嚙むことにある。その心肺を治療するには、この根本を必ず絶やさないといけない。]

謝辞

本稿を作成するにあたり、丁寧にご指導いただいた立命館大学教授・大阪府立大学名誉教授大形徹先生に心より感謝いたします。また、日頃よりご協力いただきました小山瞳さんと島山奈緒子さんに感謝の意を表します。

参考文献(著者アイウエオ順)

赤松金芳『新訂和漢薬』、医歯薬出版、1994年。

上田善信「『医方類聚』所収の『急救仙方』について」第60巻第2号、『日本醫史學雑誌』、日本医史学会、2014年、p.204。

Kristofer Schipper, Franciscus Verellen『道藏通考 The Taoist Canon』、The University of Chicago Press、2005年。

蕭登福撰『正統道藏總目提要』、文津出版社、2011年。

創医学会術部『漢方用語大辞典』、燎原、2001年。

中国中医研究院『中医大辞典』、人民衛生出版社、2004年。

宋・唐慎微撰、尚志鈞等校点『証類本草』(重修政和經史証類備用本草)、華夏出版社、1993年。

南京中医薬大学編『中薬大辞典』第2版、上海科学技術出版社、2006年。

難波恒雄『原色和漢薬図鑑』、保育社、1986年。

任繼愈主編『道藏提要』2版、中国社会科学出版社、1991年。

野口鐵郎ら編『道教事典』、平河出版社、1994年。

三木栄「朝鮮の道教医学」、『朝鮮学報』(16)、朝鮮学會、1960年、pp.71-76。